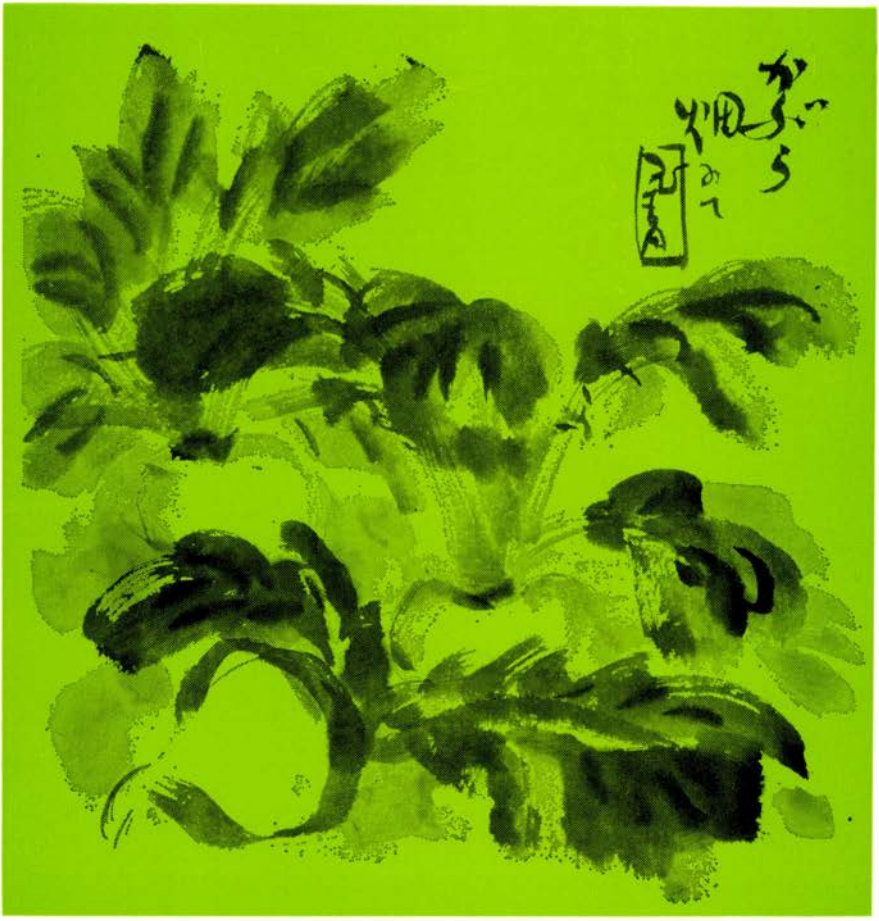
川柳塔

昭和五十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十二年一月二十五日印刷
昭和五十二年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五九七号



日川協加盟

特集・川柳〇と×

No. 597

二月号

麻生路郎先生
13回忌厳修と
「旅人」とその後の
作品普及版刊行記念

日　時　昭和52年5月8日(日)
午後1時

会　場　森ノ宮労働会館
(環状線森ノ宮駅、又は地下鉄森ノ宮下車スグ)

第1部

挨　拶　中島生々庵
講　演　東野大八氏
堀口塊人氏
兼　題　「家族」田中秀果氏選
「趣味」増井不二也氏選

第2部

講　演　右城暮石氏
小野十三郎氏
兼　題　「信」三条東洋樹氏選
「ワンマン」近江砂人氏選
「旅人」西尾栞選

会　費　1,000円(路郎著「旅人」普及版呈)

懇親宴　3,000円(同会場)

主催　川柳塔社

誌寿六百号記念
川柳大会

小賢しい指切り半信半疑です

媚びること覚えた都会の落し穴

禱るべくして修業僧人臭し

元日のままの日めくり風凍る

年頭に訥々として父の酒

中島生々庵

屠蘇の味

今日は正月の三日である。明けましてお芽出とう。本年もよろしく。新春の巻頭は歳が明けてからの原稿がやっとピンと来る。大変すがすがしいお正月であった。

何しろ13人の家族が屠蘇を酌むのだから、裏方さんの老妻や嫁たちも大仕事である。なるべく簡略にと毎年言っているが、盃が一巡するのに30分近くかかる。丁度お誕生を迎えた末孫も家憲に従うてか、舌なめずって朱盃を離さないから末たのもしい限りである。私にとって、ことし80回の正月となるわけだが新春というものは、いいものだ。歳時記に見るだけでも、初詣、初釜、初鶯など150以上もある。何とかかんとか意味づけして、明日の幸福への保証を得たいのであろう。「冥途の旅の一里塚」などは暫らく一休さんにおあずけ、臍をまげずに大いに祝盃といこう。とにかく一日一日を大切に育てて行くことがほんとうの生き方であると思う。

座右の句
散り椿　散りしく下は陽のかげり　（水客）

私の句
我が影の踏めぬ月夜へ悟りかけ　大森孝華

川柳塔　二月号　目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

屠蘇の味……中島生々庵……（1）
76年世相川柳考……本多柳志……（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（十三）……（24）
清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫
川柳塔（同人作品）……若本多久志選……（4）
水煙抄……川村好郎選……（30）
麻生路郎物語……（26）……東野大八……（21）
秀句鑑賞……（同人吟）……尼　緑之助……（28）
川柳・○と×……（水煙抄）……工藤甲吉……（29）
（同人特集）……（40）
千翁・日満・太茂津・七面山・阿茶・柳志・智子
酔々・千梢・君子・可住・鬼遊・不朽
愛染帖……正本水客選……（38）

76年世相川柳考

本多柳志

い　五つ児に　日本の医学試される
ろ　ロッキード疑獄へ　はしゃぐ稲葉節
は　判事補は　テープ聞かせて罪になり
に　日本から　スケトウだらは遠くなり
ほ　ホームラン　ベーブを抜いたいい男
へ　ベレンコは　大きなみやげ置いて行き
と　倒産のニュース　デスクは驚かず
ち　治外法権のように大物病みつづけ
り　離党した愚直が好きな　浮動票
ぬ　ぬけぬけと　又国会へカムバック
る　累卵の危さ　又OPECKに脅かされ
お　おもねって　会長のイス棒に振り
わ　若返る整形　レール取替える
か　金の生る木はみな枯れた目白台
よ　横綱を夢に　トンガで四股を踏み
た　武夫から赳夫に変る　十二月
れ　冷害に泣いて　都会の土を掘り
そ　総論は　みなばら色の未来像
つ　つかまると知って入院　フイクサー

52年度二賞候補作品中間発表……（26）
柚子の里……西尾　栞……（46）
川柳集団……西田柳宏子……（47）
雅号ぶっちゃけばなし……玉置重人……（37）
初歩教室……樫谷漫柳……（63）
大萬川柳「つづく」……本田恵二朗……（50）
柳界展望……川村好郎選……（52）
51年度本社句会最多入選・滋雀氏、月間賞・智子さん……史好・新之助……（54）
本社一月句会……（庸佑・整理）……（56）
各地柳壇（佳句地10選）……竹中肖二選……（56）
「消防車」……河井庸佑選……（61）
一路集「花嫁」……原田一風選……（48）
「豆まき」……遠山可住選……（49）
編集後記……（一三夫・葉子）……（67）

座右の句

牛の瞳に人間何をあわてとる　（栞）

私の句

新しい名に馴れ花嫁よめになる　内海幸生

ね　値上げ値上げ　又音を上げる家計簿
な　何事ぞ　県知事さんの袖の下
ら　ランドセル中はクレヨン　電算器
む　無駄使い　綱紀粛正通達書
う　売り出しへ　徹夜混乱宝くじ
の　農政不在　実らぬうちに押しつぶし
く　黒沢の　デルスウザーラ　グランプリ
や　やくざからの　みやげで飾る署長室
ま　末章は拘置所　角栄立志伝
け　経営学の博士も居って　社を潰し
ふ　ふる里は行けず　電話もかけられず
こ　強盗を　捕えて見ればポリスなり
え　絵に書いた　餅を売り込む選挙カー
て　天皇さまも今日は嬉しい五十年
あ　アーロンも抜けと　王ちゃんおだてられ
さ　雑居ビル　火災保険もよりつかず
き　記憶喪失には　勝てぬ国政調査権
ゆ　ゆとりある教育　塾をよろこばせ
め　目白台から　リモコンで操られ
み　三木おろし　与党の中を吹きぬける
し　歯科医さん　歯より差額でよく稼ぎ
も　モントリオール　ああ日の丸の美しさ
せ　政治屋に　白灰黒の別が出来
す　するが湾　はらはらさせる地震学

川柳塔

神戸市　小浜牧人

み仏の瞳恐れる罪をもつ
鎮魂の雪が降り積む無縁墓
人妻の恋に踏み絵が置いてある
石庭の石を心の眼で見詰め
血圧を忘れて唄う三の糸
母の背のいよいよまるく年の暮

鳥取県　鈴木村諷子

微笑みを知らない犬に尾っぽあり
岩をかむ瀬もあり淀む渕もあり
ふたりして妻よ金婚祝おうか
政治も献金　火葬場もチップ
奥さんと誤解をされたままでおく
血の通う手綱を渡す牛買いに

寝屋川市　宮尾あいき

医者通い長生きしたい訳でなし
おばあさんの呼名にもなれ年が暮れ
老女一人亡夫の夢を抱いて生き

若本多久志選

台所の湯気が平和の彩にする
テレビへ泣いて心の素直とりもどす
桝酒に柳人同士の幸に酔い　（操子さんの句碑除幕式）

和歌山市　若宮武雄

国宝は工（たくみ）の汗を語らない
陽の目みぬ五重の塔の芯柱
騙された疵を自嘲が消してゆく
柔らかな鞭へ裸になってみる
老いて尚　見果てぬ夢へ眼の手術
眼帯の闇　安らぎは妻の声

今治市　月原宵明

シグナルの赤に方針ふと変り
商人として十円に妥協せず
保線夫の鶴嘴昔のままの唄
直線に歩むブーツで恋が待ち
あと幾つ寝る数の子の塩を抜く

八尾市　高橋夕花

花の種一つ一つを子に遺す

百人一首恋の宴にひとり酔う
シャンソンのリズムで胸の枯葉舞う
冬眠のねぐらに落葉あたたかい
ゆきずりの老婆切々孤を語る

松原市　谷垣史好

わが道は愚直コトコト豆を煮る
耳遠く母の誇りは元士族
母のいない闇の深さを考える
冬眠へ文庫四、五冊あれば足る
巻頭の一首きびしき冬木立

美祢市　安平次弘道

除夜の鐘妻への手形また落ちず
霰ころころ童話が生れるトタン屋根
餅搗器男は出番奪われる
二百カイリ魚の知ったことでなし
太陽を買うて高層ビルが建つ

大阪市　有信新之助

ポルノ向きの漢字もいろいろあるものだ
性急に治す薬でまたやられ
たった一人渡る信号の不気味
末っ子の晴着へ女を終えた妻
竹筒に貯めた小銭のような愛

高槻市　若柳潮花

舞い扇ここにも四季のない舞台
だまされて見る気男の嘘を抱く
緋に燃えて何故秋に咲く曼珠沙華
バラ色でない人生は口にせず
ビン詰めのまま藻動かず冬に耐え

尼崎市　黒川紫香

ざわめいてみても枯木の音は音
満ち足りた顔で亡妻夢に立つ
金糸銀糸奥の一間にある笑い
手水鉢月が崩れている寒さ
カタカタと独りぼっちの戸を叩き

岡山県　嘉数千代香

野仏の肩のまるさも冬の彩
野良犬を追えば哀しい目で見上げ
札束の夢　善人に抱かれたい
軍靴もう消えて義足のひとりごと
憎しみを断つ刻　星座美しい

和歌山市　野村太茂津

きびしさを試す北風なら堪える
捨て石を拾う　たくらみ消えぬうち
赦す日の心は己に勝ち誇る
蓑虫の雌にあげたい夢の翔
報われる筈を捨てれば小気味良し

藤井寺市　西いわを

除夜の鐘今年の嘘を封じ込む
生きて行く愉しみとする重ね餅
匂わない菊よお前は保守党か

ペンキ塗り正月さまのお迎えか
金箔が落ちても阿弥陀如来さま

岡山市　川端柳子

人間も通るのでしょか　けもの道
愚痴聞いてほんとの友でいてあげる
なにがしの赤あたたかし　みかん色
いまをどう生きるか赤エンピツなぞる
冬眠の蛇を賀状にかつぎ出し

松江市　中川晃男

眉　まつ毛　紅を落とした昼の風呂
コーヒーの匂いにロマン立ち昇る
真剣に生きる日拍手背なで聞き
天守閣にらみのきかぬビルが聳ち
年賀状一年ぶりのお手を見せ

大阪市　不二田一三夫

花道で三木さん六法踏みそこね
時差呆けに馴れて編集担当者
射たれるにしても改造ピストルとは
犯かすという言葉が消えるハネムーン
宝くじ買うため死んだとも云えず　（一千万円40本）

倉敷市　稲田豊作

仲人が無茶な採点持って来る
人生の愉楽を叱る養生訓
今日の風　老の嘆きによそよそし
帰去来の雲と話している平和
酌ぎ足して妻の温みが身に泌みる

桜井市　岩本雀踊子

せい一ぱい生きる男のちびた靴
水煙へ大和の月が寒く照る
鬼になる言葉の端をやわらげる
魚臭のせて鶴橋駅を出る電車
ソットしてくれぬ世間が憎くなる

八尾市　宮西弥生

ハンカチの白い男の過去を聞く
初日の出拝む姿が憎めない
七色の羽を磨いて誰と飛ぶ
木枯しの別れは絆を抱いている
生きかたの一つ危険な橋を選る

八尾市　高杉鬼遊

雑兵の名刺は軽くあしらわれ
うどん食う隔りもなしガード下
大金を失うおそれなき暮らし
宴会に莫迦になれない莫迦でいる
歳の暮れ何に追われる人の群れ

倉敷市　能登原白水

元旦の香りを開く新聞紙
年越えのお茶はほろ苦しまた甘し
元旦はおしゃれ　雲まで紅を引く
霞着て眠るが如し春の海
ある時は友　死火山の貌となる

大阪市　本多柳志

倖せな女にぜい竹からかわれ
ショッピング女のタフなハイヒール
去るものは追わぬゆとりを十二月
平和とはいいな男性化粧品
池の鳥借景にして文字が映え　（操子氏句碑）

西宮市　島居百酒

幔幕に囲われ冥加に薫る菊
理想追う肩は四角に風をきり
ある時は他山の石にされており
妻の座でこぼす苦労も幸とする
出直しをまた繰り返す無駄な悔

富田林市　岩田美代

ありったけ寿掬う銀の匙　（息子結婚二句）
カップルを見送り無題の日となりぬ
新婚の便り始めて〝おい〟と呼びました
山茶花がこぼれつづけるいじらしさ
大ボラを吹いてる男の十二月

岸和田市　高橋操子

葛城伊三郎さんを憶う

ひま出来た日々追憶の涙ふく
あの時の言葉あるいは別れかも
ベッドの白さよ永久にかえらぬ人となり
柳友がみんな来てます通夜の席
天国の句座でラバさん人気者

倉敷市　野田素身郎

看板を塗りかえて待つ十二月
妻と同じ名のホステスで弾まない
雑煮餅たよりない歯が二三本
ジーパンで散歩がてらの初詣
寒いだけ数十回目のお正月

和歌山市　津田与史

石仏欠伸びしている十二月
値上りへ寒さも乗って来た師走
女一人真思目に生きて石にされ
ある日ふと落葉と対話してる僕
佗ビと寂ビ老いた男のひとり言

堺市　高橋千万子

美しく染めても落ちた葉は掃かれ
信号が赤　社会鍋に気づき
辻妻を合わす臨時の使者に立つ
残り香を気にして男のひとりごと
もう終りですが今夜の道火線

大阪市　中川滋雀

また除夜の鐘に誓った年が暮れ
賀状書く一枚ずつにある絆
淋しさをこえると風は詩になる
打ち明けて茶のみの仲の距離はおく
定期券まだ働ける先きを買う

鳥取市　河村日満

憮然とは票が足らないだけのこと
雑草の身でも故郷はいいところ
除夜の鐘ああ一年が無に過ぎる
家族みな朝寝してます福寿草
すこやかでいる腸に泌みる屠蘇

島根県　小砂白汀

とまり木のビールの泡は消えしぶり
洋上の父へてるてる坊主が吊ってある
拝まれて身うごきできぬ文化財
やはり地球はゆりかごだった震度三
けものみち辿れば文化へ迷いこみ

和歌山市　垂井千寿子

集金へあっさり開く自動ドア
澄んだ星　選挙の声を笑うてる
紋付きが義理人情をつつみ込み
夢抱いて世間を広く住んでいる
五体満足そんな自由を忘れてる

竹原市　森井菁居

倖せを摑むに朱竹画などいらず
小城でもよし妻がいる吾子が居る
雲をみている　決意に程遠く
振り返る一瞬男負けている
冬陽わけ合うて石仏春を待つ

和歌山市　内芝としよ

漬物石座して大役果してる
善意の父金も残さず悔もない
伝説も悲話も語らず池静か
自由ない盆栽可隣に美を飾る
味噌汁の香りで平和な朝が明け

貝塚市　野坂つき子

あの時の温もりだから大事がる
湯どうふへ二人の心とけてゆき
その辺のとこが男にのみ込めず
急所つく女に過去が多すぎる
コップ酒女も酔うてみたくなる

新宮市　大矢十郎

三十年続く平和に子が育ち
妻の旅雑布絞ったままかわき
初詣で神も静かに起きて待ち
当るなら当れとダンプ右折する
受取りのように賀状を見るこたつ

大阪市　金井文秋

一票へ虚礼の握手惜しまない
容色が衰えてから若作り
凡夫とは馬鹿になれない馬鹿でした
勝つ事を生甲斐にして日々追われ
最高と最低は来ぬクラス会

大阪市　小出智子

残り少ない今年の善をうり急ぐ
米にまぎれた石のずるさが憎めない

友を得て友に教わること多し
山里に柚子の香のする京言葉
デパートに行くなと財布に言い聞かす

大阪市　河野君子

悲しみを拾う夜となる喪の日記
嫁として受け継ぐ明治の智恵袋
まだ続く起伏よ覚悟の珠数を繰る
弁解はよそう真心温める
当てにならぬ胸の炎を抱いている

大阪市　柳原静香

婿の為娘に替る朝を起き
母を恋う孫へアルバム出して見せ
老い哀し療養の娘に励まされ
棄権して妻は政治に遠くいる
友情の温さに胸の戸を開く

富田林市　和田維久子

黄一色柚子の実りに酔う水尾　柚子の里（二句）
年忘れ柚子湯に友の初な頬
渡る世間に鬼も仏もいておかし
渡り切っても逢えない橋が空にある
口紅に秘めた心をみすかされ

竹原市　山内静水

下むいて歩けばパチンコ玉一つ
老いて子にしたがうボーナス貰っとく
これでいいのか年金を食いつぶす
夫婦きりああうまかった卵飯
良縁へ出る気も出す気もなく二十

島根県　堀江正朗

孫の守り倖せいっぱい肩も凝り
音ひとつ捉えてじっと目を閉じる
倖せな愚痴聞くお茶の阿呆らしさ
ほんとうに白いかな雪　頬に当て
菊に手を触れて貧しき心知る

西宮市　若林草右

猫いちず追いかねている五十肩
やみくもに逃げない猫にもある誇り
予約席　猫にもあった藪の中
結滞を耳できいてる不眠症
譲り合う席は小さくあいたまま

富田林市　板尾岳人

極楽の樹氷見事と云う便り（父を葬送りて）
ひとり旅彼岸を歩く父の髭
わかれ街重い重い頭陀袋
母の指父を見送る冬の風
ひとりの樹父の形見の山の地図

大阪市　大坂形水

耳にタコ出来るテレビの北の宿
デパートとスーパー戦のとばっちり
朝の戸を開けると犬が待っている
喫茶店近所に出来て流行ってる

子を亡くした者のみが知る逆さ事　米子市　小西雄々

母八十一才で逝く（二句）
天寿とはいえど悲しい骨ひろう
かさかさと遺骨かなしい音をたて
不景気な風につめたく舞うチラシ
灯明へポックリ病を乞い願い　青森市　工藤甲吉

媚だけで公約右派も左派も無し
ダルマから見ると選挙はみな汚れ
なによりも灯油を先に冬の陣
真っ白な面を冠って冬はくる　東京都　山根白星

再婚を子も賛成をする育ち
もう主人居ない揺り椅子海へ向く
パラシュート開かぬままの夢ばかり
眼に涙ある老犬の手を握る　今治市　長野文庫

類のない姓が自慢の只の人
応接間で死んで不幸な熱帯魚
反省もなく馬鹿騒ぎ忘年会
蒔けば芽を出すのに土地を遊ばせて　大阪市　吉田圭井堂

前身は貸す身もみ手でドアを押す
放言を地方で吐いて分析す

現代語にいともお弱い社長さん
上げ底で漸く夫の首あたり　大阪市　山川阿茶

ラッシュアワー吸いつくように漫画読み
人間のエゴ　こなごなにしてみたし
橋筋を女が埋めて年のくれ
団結の腕章つけて献血場　島根県　堀江芳子

五ヵ月の孫の宛名で荷を送り
湯気吹いて今日の倖せ語る箸
肩凝って入歯の重さ気の重さ
ぶつかってからの思案に自嘲する　豊中市　戸田古方

改札機のとこには風除けつけてない
十二単衣トイレはどないしやはるの
横顔のままでよかった女の子
カップルのどっちも赤いのをつけて　大阪市　西出一栄

心境は待ったをかけたいお正月
年毎に地球の回転速くなる
不器量を自覚している薄化粧
桜から菊まで病んで早や師走　倉敷市　田垣方大

遊園地母のない子に月が出る
川下の石　角とれたものばかり

立食いは今にも発車しそうなり
息づまる時計の針のような人

松江市　柳楽鶴丸

病院で久しぶりに呼ばれたフルネーム
おかあさんのほくろを忘れたクレオン画
エリートが踏外すと全身打撲症
ブラジャーの下はトリックかも知れず

泉佐野市　阿萬萬的

蝶のはね　ある哀しみの色で描く　（二科展を見て）
花と競う少女は花に色にとけ
煙突のけむりまっすぐ空虚な日
少女趣味かも港の風に立ちつくし

大阪市　西森花村

おもざしは母恋うる子の地蔵尊　（生駒山奥之院参道）
飲み食いは何もおまへん宝船
初参りうっかり百円玉を投げ
神様の返事のようにみくじ読み

倉敷市　水粉千翁

安らぎの寝息を聞いて母である
よろこびを息せき切って分けてくれ
夫婦愛錆びた鎖に尽きている
地についた歩幅悔いなき人の道

八尾市　大路美幸

礫より痛い噂が背に当る
出る杭を打つ槌の音大き過ぎ
沈黙が二人の闇を深くする
善人も三人寄れば悪になる

八尾市　香川酔々

千年杉仰ぎ一服したくなる
ポックリ寺に浮世の垢を捨ててくる
考える仲間に椅子を貸してやる
ペンネーム軽い善意がはいってる

宝塚市　傍島静馬

老妻の手ぬかりそっと直しとく
黙っていても娘は二本つけてくれ
恩讐を超えて輸血にためらわず
政治屋が政治家ぶって尻尾出す

大田市　藤田軒太楼

出稼ぎの当なし山に雪を見る
引き金へかかった指にある惑い
敬遠をされてる世話を焼きたがり
罪を追う法の裁きにある情

西宮市　藤村〆女

慕情しきり崩れたい気の血がさわぐ
過去慕う女ひとりの糸車
思い切り叱ったあとの語をさがす
真夜中に眼覚めひとりの部屋と知る

倉敷市　小幡里風

魂胆のあるサービスに酔うている
心までそっくり盗む恐い人

双方が忘れこんでた貸と借
今日の敵自動扉ですれちがい

小松市　馬場魚山

今日の空　女心と知らなんだ
二級酒と思えば二級としての味
刈り上げた田で赤トンボ合唱す
海鳴りを残して去った季節風

氷見市　関美子

福は内貧乏咳の抜け切らず
あくせくと来世は路辺の石で良し
同年の訃報至近弾に似て
愛終る小さな午後の片隅で

鳥取市　小林由多香

晩酌の相手がほしい夜もあり
形勢不利のらりくらりかわしとき
十五夜の月の丸みにはげまされ
運のいい米赤飯で祝われる

藤井寺市　児島与呂志

家中がよってたかってじじにする
味しみるまで冬大根煮つめられ
カマキリの死骸に冬の陽蟻の列
近道を急げば野犬に吠えられる

大阪市　江城修史

今日生きる蟻にやるせない思い
十二月不況が心の奢り刺す

訃に急ぐ旅雲海の神秘さよ
背かれて心の旅路果しなく

島根県　藤井明朗

病床にいて長命の重荷なる
四季の色　詩にもならず花の店
冬の眠りにつくふる里は雪の下
選挙後の景気を信じ三ヵ日

倉吉市　奥谷弘朗

句碑だけを残して小役人が辞め
定年へ夫婦しっかり手をつなぎ
後を継ぐ子は満洲にうめた切り
借金が平気で出来る二重あご

岡山県　直原七面山

特効薬とは金のことらし
腹に一物持って凝る肩
一徹男の乾いた唇
嘘は言わぬとそれさえも嘘

神戸市　仲どんたく

冬の陽を拾うて老いの一万歩
木枯しへ地蔵のごとく犬は耐え
自由業ですと顔中ひげで埋め
暖房車テツマン疲れの脛抓る

宝塚市　小畠無聖

水仙の露ひっそりと掌にこぼれ
濁流の世俗に摑む杭がない

遠からぬ黄泉路に帰れぬ雲が飛ぶ
ワンカップ生きている味ほろ苦い

愛媛県　渡辺暁童

やけくそで長生きをすることにする
話題乏しく　わいだんで行く
死んだ姿で　大寒の松
起承転結　火葬場直行

東大阪市　落合思月

母ありし日が甦がえる五十年　（母の五十回忌）
さわやかに別れて余韻抱きしめる
ぬるま湯の仲でも金婚近くなり
枯れ切った夫婦で貝になり切れず

今治市　原田一風

曳船の吐息夕焼け雲に乗り
棕櫚竹がサロンの不倫見届ける
消しゴムはちびずに俺が消されてた
鯨尺我が家の女系語る艶

竹原市　時広一路

次の瀬に備えて淵で一休み
大吉と出た日の運がまだつかず
疲れなぞ知らず元気な招き猫
瀬戸に浮く島　水平線をまだ知らず

大阪市　川口弘生

どっこいと古木今年の花をつけ
放生の池でも弱者食われたり
末吉の占いだけは信じとく
石有情善意伝える文字を抱く

岡山県　出原敬一

雑巾がとび交う終業日の教室
お祈から今日がはじまる施設の子
乳飲ませながら受話器をとる師走
紙漉く指の一本ずつに冬がある

玉野市　小谷仙山

北風と男の務めきびしくて
シクラメン汚職に遠く抱えている
和の一字書いて今年の筆始め
泳がせたホシが事件の鍵握る

倉敷市　藤井春日

失職中何が勤労感謝の日
凡人の喜び小さな幸でよし
七難をかくして女胸を病み
手探りで歩む孤独の道佗びし

米子市　八木千代

立ちかえる春へかわらぬ祈り抱く
虫食いもかなし遺愛の書をめぐる
人柄の味にうれしく叱られる
みち汐のような慕情の湧く別れ

大和郡山市　森田カズエ

惜しみなく愛を与えて母の老い
定退へ机のキズをそっと撫で

深水と夢二ならべて母の部屋
処世術教えてくれた回り道

京都市　松川杜的

一駅を優待バスが乗って降り
秋が残ってた陽溜りに舞う落葉
入歯には丁度よかった大根だき　（千本釈迦堂大根だき）
お大師さんの功徳もちょっぴり大根だき

鳥取県　林露杖

疼痛と闘う朝　冬の雷　（ヘルプス羅患三句）
疱疹の皮膚に四温のうとましく
通院の順路を替えてみる迷い
野良猫の妥協許さぬ眼の配り

平田市　久家代仕男

いさぎよく散る雑草は沙汰もせず
残務終え口笛まろく満ち足りる
柿の葉の未練大地にへばりつき
タレントの笑顔厳しさ知っている

羽曳野市　塩満敏

肩書きでおどかしてる初対面
禁煙一年タバコの値を忘れ
夢を見る冬のゴキブリ動かない
十二月第九のシーズンやってくる

今治市　越智一水

出発はおそくともよい亀になる
涙出るとき上向いて我慢する
悔しさを力に明日へ立ち向う
掌のひらに土をのせれば匂いする

泉大津市　村上春巳

夕焼けを信じてラジオを消して寝る
保養地の首相に似合う赤いシャツ
十二月いそがしそうな顔しとく
寄り添うてリスも年頃早春賦

兵庫県　遠山可住

涙腺の奥でわずかな手をつなぎ
通り風ぐっしょり濡れてみたい日も
蜘蛛の巣に秋が一枚ひっかかり
どちらにも言い分があり年が暮れ

大阪市　神谷凡九郎

人間万歳人間らしいミスをする
自己嫌悪そこから僕が発車する
自画像にちょっぴり嘘をはめ込んで
こんな筈でなかった自分にあきが来る

竹原市　三宅不朽

本当の泪を知っているピエロ
黒みごと着こなし寡婦のよく稼ぎ
子の宿題父の権威をおびやかし
拝観料いるよと仁王身構える

京都市　都倉求芽

笛いているくせ自分は踊らない
昨夜研いだ爪の手で握手

灰皿の焦りへウエイトレス邪険
この澄んだ空　誰も見上げない師走

松江市　岡崎祥月

最良の年一年は無事に消え
おしどりの余生は旅のプラン練る
コマの芯狂わず曲らずよくまわる
年賀状筆持つ筆に自信持ち

東大阪市　竹中肖二

縁日の出店で珠数を買って来る
思い出に賀状の筆が進まない
肉筆の賀状にこもるあたたかさ
落葉焼く煙りの行衛追う落目

東大阪市　竹中綾女

刈り込んだ庭木他人の顔となる
山茶花の花芯に蜂を見た小春
さび効いた寿司に罪着せ涙ふく
吊し柿干す里の風甘さ持つ

松江市　恒松町紅

出世した奴もないなと同窓会
狂わない日課で夫婦にある平和
柱背に坐り我が家に嬉しい日
冬の街女は生きる術をもち

岸和田市　福浦勝晴

寒月夜　主義も思想も凍てそうな
書割の明治へ派手なチンドン屋
豪勢に飲んで騒いで胃酸過多
満員車女性の髪は億劫な

松江市　小林孤呂二

凡人に策なし雪を見て籠る
鈍刀と笑われたくなし辞書を繰る
飲みたい酒　酔いたい酒で明日がある
凡そ縁のない声なり兜町

東広島市　高橋鬼焼

むだのないセールスマンの語がつづく
太陽の笑顔がみたい十二月
おしゃべりが苦手受話器が重たくて
妻だけのドラマを書いて十二月

鳥取市　両川洋々

角とれてからの丸味へ人が寄り
十二月集金人も食い下がり
十二月音する音がみな尖がり
左遷への旅と知らない子がはしゃぎ

出雲市　原独仙

平均の寿命突破へ酌む二人
恙がなき身に健康を忘れてた　（潰瘍で入院）
病窓へ人の昇天する煙り
もう一度娑婆へ戻れとエンマ様　（退院）

伊丹市　樫谷漫柳

半分は売り子の趣味を買うネクタイ
襟の幅だけに自由がある背広

しゃぶしゃぶで恋の別れをして見たい
幾万の血が育て来た砂糖きび　（沖縄にて）

大阪市　天正千梢

殿様にしたててくれて妻おとな
出張へおやすみの電話だけかかり
さみしさはショッピングに欲もなし
一枚の瓦の寄進受けてくれ

姫路市　梅谿庵不酔

侵されず侵さず我れに人の道
二次会を奢れと弱身つけ込まれ
自由主義お前も俺の年になれ
恥かしい聞いてくれるな僕の年

松原市　玉置重人

定期券五つサバ読む年を書く
酒煙草マージャン大学卒業す
まっさらの石鹸使う愛の始まり
富士をさす指に流転の夫婦旅

和歌山市　沢山福水

ちっぽけな過去の善意に花が咲き
美しく老いて不倫の恋が炎え
長生きの愚痴聞いてやる石地蔵
ギャンブルへ今日も愚かな影を踏む

宇部市　平田実男

蕗の薹遠慮しいしい春を告げ
突き離すほうの言葉にあった愛

トレードをしたい日もあり我が女房
もう一度だけ騙されてやるも母

大阪市　河井庸佑

ライバルに祝辞を贈る腹を見せ
正月は三月にすると入試の子
利用するだけされていると知っており
当りさわりなくする批判のむずかしさ

大阪市　黒田真砂

倖せへ続く道かも虹くぐる
手応えが無くて電話のベルうつろ
逢いし夜の心の泉あふれ出る
床の間の花枯れし儘年の暮

竹原市　小島蘭幸

一枚ずつ一枚ずつ来る喪中のハガキ
神様が勝たせてくれたなどと言う
ライバルの眼の輝きを忘れまい
元日の石段ひとつずつあがる

鳥取県　川崎秋女

札束がある日の俺を迷わせる
収穫の喜び知らぬイヤリング
平凡と言う幸で聞く除夜の鐘
ゆく年の足跡しっかとたしかめる

呉市　槇田英詩

医者からの断酒を妻に秘めて飲み
言い足らぬことあり一本追加する

飲みすぎて妻の読経に詫びて寝る
酔いざめの水と一緒に妻の愚痴

枚方市　宮川珠笑

すばらしい失踪を追う尋ね人
厳粛に娘の初潮告げる妻
煮大根をふきふき政治論激し
張り替えた障子の部屋で長者ぶる

大阪市　神夏磯道子

竹細工かすかに過疎の灯をともす
盆栽の梅一輪へ春の音
目減りした預金めでたい荷が揃い
デザインも妻の好みで着せられる

神戸市　佐々木静泉

子らにランクつける通知簿十二月
「あれ」だけで通じる妻がいてくれる
寒い夜を語ろう落葉した木々よ
顔の皺ふえたと妻と笑い合い

島根県　榊原秀子

霜焼けの諸手いたわる冬の夜
これ切りで忘れましょうねと女の茶
つなぎたい夢がこわれた朝のパフ
諦めの境地の是非を考える

鳥取市　大塚豊生

ハネムーンふたりで決めた駅へ降り
思いっきり七味効かした妻の愚痴
へそくりをはたく日続く十二月
お互いに折れた日　丸く判を押す

兵庫県　河原みのる

二百海里ちくわの穴を大きくせん
み仏はおおかた睡とうおわしまし
生きてるうち大切にとは知っている
弔辞への謝辞をテープに入れとこか

松山市　谷のぶお

喝采もなく七十へゴールイン
美しく塗り替えて見る過去の夢
変哲もなく朝が来てお正月
奴凧僕にも新春の空がある

米子市　増田竹馬

やわ肌も熱き血潮も老い無縁
人肌の燗で秋の夜飲むべかり
マイク持つ手付きで茶の間沸かす孫
消え残る色香一と花咲かす肚

守口市　野呂右近

投函のポストにもあり冬の音
病む都市の音とも聞え救急車
五十年夫の尾灯見つめつつ
出おくれた馬の心に似た焦り

兵庫県　大江秋月

ポケットのごみ掃除する妻の留守
晩酌へ今日の疲れよさよーなら

禁煙をさせないように販売機
遠慮した笑いがいつか五合あけ

諫早市　原田明春

明けまして不況続きの朝が来る
ボーナスへバーのお呼びがもうかかり
押して出すポットのように金は出ず
遮断機が交通違反車を逃がし

和泉市　西岡洛酔

腹立たし天を迎げば流れ雲
親切の笑顔に見つけた価値ひとつ
老髪の霜に懐古を数え合い

大阪市　室谷徹舟

今年から恩師の賀状一つ消え
初詣で外人さんも居やはった
真心をこめた歳暮は妻と行き

〃中　岩井本蔭棒

不悶なり五臓六腑に夜がない
真実を狙い会話の中に聞く
鳥取へカニ一匹で行けるバス

鳥取県　清水一保

柿一つ梢に燃えて湧く詩情
闘いが終り時雨に詩が浮かび
一日の汗一服の茶に憩う

島根県　錦織文子

健康な一票　黙々と鍬を振る

情熱の限りを燃えん独楽の恋
シゲナルへ雪三色の顔で降り

滋賀県　溝口はやを

煮え切らぬ代理は馬鹿で勤まらず
鑑識が泥の足跡かぎ廻り
白毛染鏡の嘘にはげまされ

竹原市　鈴木かつ子

夕焼けへ唄う子もなく小雪舞う
倖せの扉たたいて夢を追い
南天が雪にそむいた色で映え

笠岡市　松本忠三

激流の石塊として我をみる
万物の霊長人間だったのか
失礼は承知女の歳を聞き

生駒市　草深酔升

ボーナスへ銀行だけが騒ぎたて
カセットであげる祝詞へかしこまり
唄の順音痴につらい酒となり

岡山県　竹内翁童

我武者羅な過去振り返える自己嫌悪
白玉の秋の夜長と酒たのし
これからが人生定退の朝を出る

大阪市　神田秀峰

ブームから外れ邪念を取る拳
金出して声も渇らしてファンです

台風へ経済大国でも怯え

大阪市　津守柳信

ヤリクリは口に出せないだけのこと
習慣に追い廻されて大晦日
健康を確かめあっている賀状

唐津市　新岡回天子

安定物価又も政治に突き当り
民宿の地場の漬物チョイといけ
親分のとこに必ず長火鉢

大阪市　藤田頂留子

抽選機ガラガラ師走の音廻る
流行に右へならえしてヤング
またたいて女のドラマが有るネオン

仙台市　川村映輝

両者共神に誓ってうそを言い
二〇〇カイリ北の港は波さわぐ
年賀はがき売れ残るほど値を上げる

京都市　山本規不風

思い出の宿にゆったり古き椅子
司会者の舌華麗なる宿のショウ
むさぼりし朝の寝刻の悔消えず

大阪市　西川誓二

電話料値上げお喋りも高くつき
敗戦の将マイクへ向い兵語る
無い袖を振って奥津の湯に浸る

和歌山市　吉野富子

会者定離女の性の幸不幸
手の届きそうな処に冬の虹
貧弱な北町奉行映画村

貝塚市　行天千代

合鍵も一つ貰って婚約者
整形も短かい足はのばせない
嫉妬心からむダイヤル手がふるえ

浜田久米雄

限りない欲追追に薄れゆく
年寄りのたばこをやめたとて褒めず
晩酌の酔い年金の額浮かぶ
背伸びして見ても二月の灯は暗し
五つ桁の数字家計簿はっとする

本田恵二朗

定刻十分前にキチンと見せる顔
紳士然と構えてござる一次会
二次会で紳士の仮面置き忘れ
三次会わが家への道見失い
その次はプライバシーだと白ばくれ

正本水客

なまはげの岬は夜の風が満ち
のびやかな芝生が日本海に落ちて風
太古の岩を溢れてお湯が透きとおる
打たせ湯に窓の高さが冷えてくる

霧の中から吹雪いて山頂を教えられ　橘高薫風

沖から沖から寄せる福音初春の海
新年に人恋しきも齢なるか
大地震説専らなり餅の罅　藤沢桓夫先生のご母堂を悼み
白椿大往生へ澄みに澄む　川村好郎

風向きへきれいな握手して別れ
生きもののように訃報のベルが鳴り
今日だけをうつす鏡を手離さず
夜のない夫婦になっても夫婦なり
あなたとはもう他人ですと来た歳暮　菊沢小松園

道しるべ極楽近いと書いてなし
もうこれで安心という日に逢わず
お勝手は何んでもいいに困り果て
十二月亀動くまでじっと待ち
凡人の不幸に泣くほど暇はない　西尾栞

おおらかな海元旦の酔い心地　（御題海）
　悼岳人君の厳父御逝去
金剛山揺るがす程に哭いてよし
山陵に詣ずる我は甲斐源氏　（柚子の里）
ホッホッと抽子の香りの句座に在り

いたわりの言葉を刺と思う日も
老醜をかくす哀れや身だしなみ
生命線不思議に当る七十五
哲人の思考で指紋ジッと視る
もう少し娑婆においでと阿弥陀様　若本多久志

与野党をまとめる器見当らず
大臣もばたばた落ちて貝になる
見て見ない振りを相次ぐ倒産記
大勢は二百カイリで荒れる海
惨敗に疑懼のカケラもない自民　伊藤茶仏

間髪を入れぬ手当に救われる　（入院して）
命冥加の奴もありけり死を遁がれ
老いぼれに甘えられているナース
重病人らしい所作だが吸飲み器
廊下行く鼻唄退院間近らし　小西無鬼

愛憎の絆が冷えて入る病院
恍惚は当然と見る他人の目
走り過ぎとは右端にいる批判
プロレスの解説ピンと来ぬ師走
商根はおしゃべりの中にものぞく芯　尼緑之助

麻生路郎先生(右)と岩崎柳路郎氏
大連の露天市場にて（昭9・3・22）

麻生路郎物語

―六十一歳の情熱―

（26）

東野大八

川柳雑誌復刊号（№二四〇）は、日本敗戦一年目の昭和二十一年八月号で世に出た。焦土の中の趣味的刊行物としては戦後第一号と自負してもよさそうである。

戦後のいわゆるカストリ雑誌時代は、終戦直後、チリ紙同様の仙花紙（仙貨紙とも泉貨紙とも書く）でエロ・グロオンリーのラチもない卑俗な悪本が世に氾濫した。

見るからに粗悪で下卑た記事や印刷のB5版であるところから、粕取焼酎同様にマガイモノ、ニセモノの意をこめて、〝カストリ雑誌〟と呼称された。このカストリ雑誌は、昭和二十四年にピークを示し、二十六年におよんで消滅していく。この愚劣な大衆雑誌は、戦後日本のいわば恥部の象徴とされた。

昭和二十六年のこの種の雑本の消滅は、印刷用紙の生産が軌道に乗り、用紙の配給制が撤廃されたことが転機となっているが、川雑はそのころすでに大型柳誌として本紙三十余頁を維持して本格軌道に乗っている。戦後復刊号のザラ紙八頁が嘘のようだ。復刊号より

笑いの復興運動（予告篇）

笑いを忘れた国民の顔をジッとみていると、なんだか淋しくなってくる。かつてはくだらないことにもゲラゲラ笑って、その軽薄さに顔をそむけたものであるが、戦時中の猿ぐつわが利き過ぎたのと、口をきいても腹が空くという現実に直面したのとで、相変らず笑いはない。イヤ、笑えないのかも知れないが、この儘捨てておいたら、人間の影を見ているような国民になってしまうだろう。

そこで私はお互いに大きく口を開いて笑う運動を近くおこすことにしたいと思っている。ムリに笑うことはばかげているかもしれないが、柔道でも型から入って真技を発揮するところまで行くことを思うと、求めて笑っているうちにホントに笑えるようになるにちがいない。人間の心の底には、必ず笑いの水が満々とたたえられているにちがいないから、私は地面へ穴をあけて、井戸水をポンプで吸い上げるように、国民を笑いの世界へ誘道する役目をつとめようと思っている。

（川柳雑誌・復刊号）

路郎が戦前から唱導しつづけた、川柳の社会化運動の主旨がここにあり、路郎は戦後の虚脱し、退廃と夢のない敗戦国日本に、彼自身、川柳の夢の拡大をそこに思い描いていたことがわかる。敗戦日本こそ、新しい笑いの

エスプリに溢れた土壌でもあることをみてとっていたのである。

とにかく戦後は、文化に飢え新知識を渇仰し、心のユトリを求める国民の欲求が、活字に向って奔騰した観がある。実のところ、新聞、雑誌、一般刊行物とみれば、人々は眼の色を変えて殺到してきた。川雑復刊号の、川雑出版部と称する社告には「街の雑音」（売切）「大空」（売切）「人の一代」（売切）「累卵の遊び」（売切）「詩人複眼」売切の活字が眼につく。

こうしたなかで、終戦直後の資材難と欠亡生活の中にもかかわらず川雑は、「麻生路郎著・新川柳評鑑賞」（定価二五〇円）「戸田孤蓬、麻生路郎鑑修・川柳二千六百年史」（定価八十銭）「戸倉普天著・普天随筆」発刊の予告を出版部の名で出している。

「昭和二十一年八月不朽洞会理事長戸倉普天氏丹波へ帰郷のため辞任、後任は中島生々庵氏就任」（山雨楼メモ）

「昭和二十二年二月十日麻生路郎・岸本水府・中島生々庵三氏に大阪府知事から〝浪華文芸賞〟授与せらる。四月二十三日蟹の目川柳社の一周年記念に招かれ金沢市へ行脚、西本三笑居泊・金沢放送局から「手をさしのべる川柳」を放送。六月一日文芸賞受賞記念大会を不朽洞会主催で住吉の生根神社で。八月九日大阪府主催の文化夏期大学の講師として貝塚市で「川柳と生活講述。川雑十月号に「三つの苦言」柳界の新鮮味を待望して—全国川柳大会私案、事後承諾について、中堅作家の脆弱性を執筆。十二月二日名古屋市で開催の「すげ笠社主催の全国川柳大会」に出席。BKから十二月二十九日「歳末のユーモア」を放送。三日新東海新聞主催の座談会に出席。BKから十二月二十九日「歳末のユーモア」を放送。葭乃夫人十一月十六日大和の三本松村に移らる、不朽洞山房（山荘）」（山雨楼メモ）

こうして川雑は着々と、戦前の面目をとり戻し、路郎の活躍も次第にあぶらが乗ってきた。昭和二十三年路郎は六十一歳になった。

—**六十一まだ情熱は燃えに燃え**　路郎

と詠んだ。

「ところが石井寿一大阪日日新聞社長がニンマリ笑って「相手は二十七か八か」と言われた。私はこの思いがけない新解釈に一寸戸まどうたが、とっさに否定していた。

「この句は最近、私が還暦を迎えたので、今後の柳界に対していかに生きるかを句にしたのに過ぎない。この句の構成には恋情の意味はみじんも含まれていないのであるから誤解のないように」と私は大マジメで答えた。きょうこの頃なら〝まあそんなところかな〟と受け流すこともできたであろうが、なんしろその頃の私は言葉にベールを着せることを知らなかった。それは今でも持ち続けた私の若さである」（川柳雑誌№四四九・昭和32・路郎）

「戎橋筋のオメガで御還暦祝賀の集りが持たれたのは昨日のような気がするが十年になる。予想を遙かに上回った盛会に世話係が目を白黒さしたり、当時の電力事情で懇親宴の最中停電となって、ローソクの灯で祝盃をあげたり、その雑然たる中に参会者一同の親しみと愛情がみち溢れてほんとうに心から御健祥を寿ぐ雰囲気がひしひしと感ぜられた事が今日でもはっきりと脳裡に浮んで来るのである。

真白い麻服の先生の後に、つつましやかに葭乃奥様が続かれて会場に入って来られると満堂破れるばかり、やがて「六十一まだ情熱は燃えに燃え」という世紀の名句が発表せられて、あれから十年である」（川柳雑誌№三六二号・昭和32年7月・古稀特集・中島生々庵）

不朽洞会永年の理事長中島生々庵は、昭和十四年の松坂倶楽部川柳部に入門、路郎門下の筆頭としてよく路郎逝去のその日まで、形影相伴う労苦をともにした人物だが、昨年四月小石夫人とともに、柳道三十五年の名跡をつづる華麗なその作品と彩筆による「生々楽天」を刊行している。

路郎句碑の第一号は、この生々庵医博経営の、中島小児科診療院後庭に建てられている。同院新築に祝意を表しての不朽洞会有志の手で昭和二十五年五月二十八日に建立された。小児科院にふさわしくその句は

—**すべりんこ　親は涼しいとこで待ち**　路郎

しかし、木碑のため破損甚だしく現存していない。

筆のついでに路郎の他の句碑についてふれておこう。路郎揮毫による句碑は四基で、その建立は昭和二十五年に三基、その翌年の二十六年に一基で、この両年に集中している。

いわばこのことは、路郎と川雑の最盛期を示しているように思える。

路郎句碑第二号は、昭和二十五年八月三日奈良県宇陀郡三本松村（現室生村）上田翠光宅に建てられた。海抜五百米の山村で、葭乃の戦中疎開先で、麻生一家は〝大和の山荘〟と呼んでいた。

「ここへ移ったとき、私は障子を押し開いて前方に折り重っている山又山の美にうたれ思わず、くちづさんだのが

名も知らぬ山の起伏をうれしがり　路郎

であった」（川柳雑誌№二八〇号）

句碑は地元の石に彫られた。建立者は上田翠光で、その句を刻んだ碑も現在している。

第三の句碑は、岡山県久米郡久米南町、国鉄弓削駅前に建立された

俺に似よ　俺に似るなと子を思ひ　路郎

除幕式は昭和二十五年九月十七日でこの日西日本川柳大会が開かれ、百四十人が集り盛況で、地元の浜田久米雄の活躍が目立ったとある。建立のキモ入り役は丸山弓削平。

第四の句碑は岡山県和気郡吉永町福満の大森娯句楽居の前庭に建てられた。

—古くとも僕には仁義礼智信　路郎

「この句に盛られた思想が古いの新しいのと言って見たところで、それは口頭の論議に過ぎない。むしろこの句境に沿うて、その生涯を貫くことが出来るとしたら、人生の幸福これにすぎるものはなかろうと今も信じる私なのである」

建立されたのは昭和二十六年四月二十二日

話をもとに還えそう。

路郎還暦祝賀川柳大会は、昭和二十三年七月十一日大阪市心斎橋筋戎橋オメガハウスで不朽洞会主催で開かれた。参加者三百九十一名（山雨楼）とある。稀有の盛況である。

燃えに燃える川柳への情熱に、路郎の活躍はつづき、山陽筋や九州一円を川柳行脚し、十一月には不朽洞山房（頓光寺＝葭乃夫人疎開先）で徹宵句会（23人）まで行っている。

この年、年来の公私にわたる柳友岩崎柳路が逝った。命日は十月三日。

「路郎師は〝川柳仏〟と題し追憶を語られたが、痛惜の情は川雑誌面に溢れた」（山雨楼メモ）

柳路は、路郎の北支蒙彊の旅を斡旋した人物で、松野夫人とともに不朽洞会々友として格別の間柄にあった。門下で柳号の中に路郎の「路」を用いているのは彼だけである。

もっともこの柳路は、麻生家とは別の意味で深い間柄にあったようだ。

「純子は早くから岩崎柳路氏につれられて北支へ渡り、私達とはほとんど別な生活をしておりました」（葭乃書簡）

この長女純子は、大阪上福島の古本屋時代の大正四年四月十七日の生れ。

「私の結婚後、河盛彦三郎の後を継ぎ、河盛純子となる。河盛純子のちに杉生家に嫁して子無し、河盛彦三郎の家は絶家となる」（葭乃書簡）

昭和二十四年、葭乃はながい疎開生活を打切り十月末帰阪した。

「北川春巣さんの御力添えで、トラックを回して貰いようよう万代の家へ戻りました」（葭乃書簡）

「私は六十ぐらいで一応私の従来の仕事を切りあげるつもりでいたが、それが出来ずに七十になってしまった。このくいちがいはたしかに戦争が責任を持ってくれる筈である。

その戦争も敗戦ではあったが、私の人生に付加するものの少くなかったことは疑う余地がない。それを考えると私の仕事の予定の上に十年の延長があったとしても悔いることは少しもないと思っている。

とはいうもののこころで一応けじめがつけたい。そうした考え方が毎朝眼が覚めると私の頭を占領する。

ではどうしたらよいのか、現在の煩わしいいろいろの糸を絶ち切る手段は—これは容易なワザではない。漂然と家を捨てる訳にもいかぬとしたらどうなるのか。（中略）どう考えてもここらで多少の角度を変えたい。それは作家としてのもっともっと孤独性がほしい。（中略）私は解放されたい。そして私自身の芸術に生きることと、短詩界が少しでもよくなることに微力をつくすことに私の仕事を絞っていきたい」（川柳雑誌№三六三・昭和32・路郎）

×　×

青木迷朗

誹風柳多留廿五篇研究

—（十三丁）—

西原亮・入江勇・紀内恒久
鈴木黄・清博美・青木迷朗
室山三柳・八木敬一・岡田甫

230　**八十九日にきすをもう釣に出る**

西原—『嬉遊笑覧』巻十二下に次の記述がある。「きす釣は立春より八十八夜を過ぎざればつれず。一説に、それにかぎらず時鳥の鳴を聞かば、東中川近辺に出てねらひ釣して得もの有りといへり」云々。

八十九日というのは、右の八十八夜の翌日という事になり、きす釣り人は待ちかねていたように、もう釣に出るというのである。

三人できすならやうやう五六匹　三〇・1

八木—『河羨録』に「春ぎすは……八十八夜の明けの日より出るといへり」とある。

青木—同。

きすにはまってくだかけに釣支度　一三二・8

岡田—同。

231　**まきれ扇を遣ってる玄関番**

西原—武家の玄関番人を「玄関番（ゲンカバン）」という。彼が身分不相応な扇を使っている。まぎれ扇（来客の忘れもので、持ち主の不明な扇）にちがいないというのである。

岡田—同。

232　**天文をかんがみ女房夜着をとき**

西原—「夜着」は夜着布団のこと。それをほどいて、綿を打ち直したり、汚れをとったり表布の修理もしなければならない。

久しい鳴りで女房ハ夜着をとき　篇三・6

の句の示すように、つゆあけ雷のあとが、夜着ときのよい季節である。この季節及び天候を考えることを「天文をかんがみ」とおおげさに、まさに陰陽師か三国志の孔明のように表現したところが面白いのである。

夜着の綿女房に内をせはめられ　二八・5

入江—賛。明日は天気らしいからと洗い張りの用意。

青木—同。例句の「久しい鳴り」は、「しょっ中、口に出しての小言」が正解だったと記憶しておりますが、「久しい鳴り」の用例が見つかりませんので、またまたここで、「雷鳴」か「口小言」か大いに迷って居ります。

岡田—青木氏の疑問、やはり女房が「早く夜具の洗濯をしなくては……」と口ぐせみたいに言っているが、家事が忙しく出来ないことを詠んだものと思う。

233　**神楽堂袴がないとまだはやり**

西原—神楽堂は神社の神楽をする堂で、美しい神子の舞いがエロティックな見せものとし

て人気があった。おなごの神子の袴がないともっともっと流行するであろうという意で、エロの対象としてとらえている。

異な所へ当たって笑ふ神楽堂　　末二・22

みんな鈴ふり立て見る神楽堂　　二七・22

室山―贊。チラリズムになって……。

青木―同。

笑ったらまだはやらうに神楽堂　　明六・礼3

足の指そらせて歩く神楽堂　　明四・梅2

岡田―同。

234　**はだしになって立むかふ下手の鞠**

西原―蹴鞠に興ずる庶民の姿である。元来、堂上方の遊びで、正しくは水子にくつをはいてする。下手な鞠だけに、くつを履いてするとうまくいかない。こん畜生、とばかり、もろ肌ならぬ、はだしになって立ちむかう元気のよい姿を描いている。

下手の鞠かわたびなどハのきと見へ　　一〇・19

下手の鞠足をくらへと言ッたよふ　　四四・10

尻ひつからげ立向ふ下手の鞠　　三三・12

室山―贊。礎稿例句、第三句目と呼応。見学してみるとわかるが、実際はなかなかうまくゆかぬものである。

岡田―同。

十四丁

235　**素人の普請真木わりなとか出る**

鈴木―辞書によると、「普請」は堂塔の建築などの労役に従事する事、とある。禅寺の勤労奉仕に信者が動員され、建築などに従事しているが、何れも素人が多いので、道具に薪割のようなもの迄も持っている、といった句か。

室山―普請をする場合、プロの大工なら木を縦に切るのに縦引きの鋸を使用するのに、素人は面倒でもあり、平常用いている薪割などで乱暴な切り方をするというのではなかろうか。素人の手荒い粗雑なやり方をいった句であろう。

入江―前説贊。薪割はただそれだけの道具。無神経なやり方で、不可能を可能とする素人のパイオニア魂のおかしみ。

紀内―室山氏説贊。現在のように「日曜大工セット」等がない故、ありあわせの道具でやるのである。

素人普請薪わりやなたを出し　　一四二・4

岡田―同。

236　**神ハ帰らせ給ひけり三番叟**

鈴木―謡曲『竜田』の、「神ハ帰らせ給ひけり」の文句取り。三番叟は極めて神聖視された能楽『翁の曲』の老人の舞で、初春の仕初め、顔見世等の時に舞うもので、何事によらず行事の最初にするものを「三番叟」という。

句意は、顔見世興行は出雲から神様がお帰りになった時に、三番叟を舞うて始まるのだという事で、十一月一日顔見世狂言初日、芝居道にては、本日を以て一年中の元日と定め未明に式三番を踏む。これを翁渡といい、七ツ時より脇狂言が始まるという。

神々が着くと初める三番叟　　安六・松4

室山―贊。ただ能楽の場合、曲名は「翁」であり、シテ翁、ツレ千歳、間狂言が三番叟と面箱持をつとめる。したがって三番叟は重要な役ではあるが、中心人物ではない。芝居の三番叟は祝儀として序幕の前に行なう。

能の三番叟は、シテ・ツレ退場の後舞うので、主題句もそのようにも解せるが、やはり礎解のように、神無月の次の十一月の顔見世と解する方が正しいだろう。

岡田―同。

237　**八百五丁常体の晦日也**

鈴木―晦日は十月晦日。八百五丁は芝居町（堺・葺屋・木挽の三町）を除いた大江戸をいう。前句でもふれた様に、歌舞伎は十一月一日を一年中の元日と定めてあり、十月の晦日は芝居町では大変に忙しかった。だから八百五町だけは常体の晦日でいつもと変らない。

二町まち二月早い大晦日　　三五・12

十月の晦日八百五町寝る　　七四・26

室山―贊。顔見世初日の前日。

紀内―同。

八百五町十月の只晦日　　一四五・2

岡田―同。

路郎賞 川柳塔賞 候補作品中間発表

自 五十一年九月号
至 五十一年十二月号

路郎賞候補作品

正本水客

到着順

川枯れて貧しきものを見てしまう　小島蘭幸
ショーとして鵜匠きびしき眼をもたず　三井　酔夢
禁煙を誰も気付いてはくれず　柳原　静香
動く歯の舌に親しきもののうち　山根　白星
誤診とは言わず薬が替えてあり　小浜　牧人
屑篭の位置まで腹が立ってくる　谷垣　史好
きりぎりす胡瓜の色で死んでいる　工藤甲吉
注ぎもせず注がれもせずに缶ビール　原田　一風
水嚙んで飲んだ鶏に胃が痛む　山内　静水
立ち枯の白さやたらに描きとうて　戸田古方
満天にギリシャ神話がはめてある　小砂白汀
片っぽの目を閉じておく善もある　高橋夕花

若本多久志

移り香に男の罪が匂うなり　小浜　牧人
スランプの靴をみがいて妻の幸　高橋　鬼焼
ここからはひとり行く道父と子の　白岩文衛
励ましの重さ　弁当箱を提げ　水粉　千翁
燃えて落つ夕陽に未練の朱が残る　岩田美代
すばらしい夢は瞳の裏に住む　和田維久子
ゆれながら倒れまいと独楽　必死　不二田一三夫
金に縁なかった父の骨白し　中村ゆきを
濁りなき少年の眼に明日を問う　西岡　洛酔
茶のぬく味両手で心あたためる　越智　一水
大安吉日親に悲しい日を祝い　若柳　潮花
耳垢をとって悟りの顔でいる　遠山　可住
水は低きに流れて昂ぶらず　西川　誓二

橘高薫風

恋終るつくつくぼうし鳴いていた　小島蘭幸
沛然と雨人間を一人にす　遠山　可住
右の町左の村の一河の情　鈴木村諷子
フレッシュなトマトに似てる夏の恋　野坂つき子
四季の国匂い忘れた花もあり　大峠　可動
きりぎりす胡瓜の色で死んでいる　工藤甲吉
本棚の本死ぬ日のことは考えぬ　小出　智子
いま出来ることは子供に書く手紙　山内静水
札束を固い握手と錯覚し　遠山　可住
曳き船がゆっくり帰る午後の愛　谷垣　史好
深刻なふたりへ熱いうどん置く　有信新之助
街灯の処だけ雨の独り言　都倉　求芽
昼の風呂アルキメデスの原理など　山根白星

西尾栞

片隅の広さをさだめとは云わず　水粉　千翁
一人だけ云う真実は無視される　不二田一三夫
色のない風で女をだませない　宮西　弥生
おとぼけの術で母子の和を保つ　宮尾あいき
揚雲雀制空権を主張する　塩満　敏
吊革を両手で握り夏に耐え　野田素身郎
待ち伏せと云う愛情が憎らしい　小幡　里風
出迎えの口下手荷物を提げたがり　林　瑞枝
階、行、草、仮名も混じえて世を渡り

はい一つ多い返事で聞いてくれ　都倉　求芽
花嫁を見る巫女の目は女　堀江　芳子
合掌す銃もスプーンもいりません　岩本雀踊子
指先の欲が残っている動き　西森花村
初対面から善人の酌ぎこぼし　堀江　正朗
河村　日満

川村好郎

父の死後父の無口が判りかけ　中村ゆきを
老醜をきわめつくして美に返る　西　いわを
新調の靴定年を蹴り返す　八木　千代
指櫛に愛の憂いが這い上る　河野　君子
一つだけ鳴る鈴がある母子家庭　小浜　牧人
眼鏡換えて確めてみる子との距離　小出智子
過去未来その真中で本を読み　香川　酔々
射程距離にライバルがいるゆとり　岩本雀踊子
深刻な二人へ熱いうどん置く　有信新之助
見透しの早い女で彩がない　岩田　美代

菊沢小松園

恐ろしいもののひとつに無関心　小島　蘭幸
制服を着ると掟が纏いつく　小浜　牧人
切られても蚯蚓は土を離れない　西　いわを
七人へ斬り込むラッパ妻が吹く　山内　静水
そのままで散りたいだろうカンナの朱　三宅　不朽
死ぬるまで朱実は夜の女です　谷垣　史好
時々は帽子脱ぎたくなる人形　大路　美幸
虫の声切れ目があった別れぎわ　岩田　美代
片っぽの目を閉じておく善もある　高橋夕花
出嫌いの母へ流行着せたげる　宮西　弥生

川柳塔賞候補作品

戸田古方

華も葉も根も役立てて蓮は生き　田口　虹汀
本当の涙小指でそっと拭く　本庄　快哉
もう昨日の蟬でないかも鳴いており　大原　葉香
善人のその日その日を音たてず　大林曲ん手
台風に勝ったかがしは斜め向く　那須　鎮彦
日本の四季へとけこむ黒瓦　江口　度
そのうちに着くさと川はあわてない　安藤寿美子
陽へ土へ詫びて大樹が枯れて行く　岩下照沖
大臣の相を持っている乞食　文川　野生
良き声にあらねどうれし祝い唄　麻野　幽玄

大坂形水

日本の四季へとけこむ黒瓦　江口　度
絶景にお坐りやすと木の根っ子　中村　優
停電の闇安らかになってくる　桑原　道夫
爆発を待っているのは女かも　田中紀美代
地獄絵をかいて自分でうなされる　安藤寿美子
生きんため女は針を隠し持つ　池田　露子
ぐるぐると廻る矢印だってある　高橋　古啓
通り雨誰にも云わないことにする　時末　一灯
平社員の机はどこにでも置ける　西本　保夫
さすらい人に同じ笑顔の石地蔵　小谷　葉子

小浜牧人

庭ほうきだけが知っている孤独　樫村ふみよ
たぎるもの消す石段をかけ上り　西尾　功
絶景にお坐りやすと木の根っこ　中村　優
裏切りよもう浅い瀬は渡れまい　杉浦婦美子
溜息を捨てて見給え花の道　納　史葉
洗っても汚しても私の顔であり　安藤寿美子
善人のその日その日を音たてず　大林曲ん手
少年よ泣くなら石を捨ててから　桑原　道夫
ふくらめる餅を見詰める子なし妻　岩下　照仲
一歩前進ペースは遅々としていても　渡辺　南奉
花そっと捧ぐ人あり女人塚　梅本登美也
スランプへ秋の本屋をはしごする　柴田恵美子

—同人吟—

秀句鑑賞

——前月号から——

尼　緑之助

女三人ふつと話題の無いこわさ　垂井千寿子

柳壇のみならず、歌、俳の方でも女性作家の活躍が目立つ。直観的に一点をするどく見つめる、その集中力、割り切り方が、他を惹きつける作品となるのではあるまいか、最初に女性作家を取り上げて見る。

この句、二人なら何んとか話題があるが、三人となると微妙になって来る。平凡な表現だが、「ふっと」がよく効いて、模索旋風が突然湧き上って来る。少しオーバーだが、肌寒いものさえ感じる。

噂話の中で裸にされている　小出　智子

噂話も末端になるとこわい。これも女性の場合より重くのしかかって来るようだ。

気の毒な鏡よ笑えぬ日が続き　野坂つき子

主人公の悩みを鏡に托して問いかけている。巧みな暗諭である。

アルバムはある日の倖せ抱いたまま　本間満津子

アルバムに追想を詠った句は随分多いように思っているが、句語に無駄がなく、直感から生れた卒直の功であろう。

道問えば嵯峨野やさしい京なまり　垂井千寿子

晩秋へ八瀬の風情よ紺がすり　小畠　無聖

二句共、下五できりりと結び、きれいな風物詩となっている。舞台効果もあるようだ。

分け合えるとき貧しさがあたたかい　水粉　千翁

昔の軍歌「戦友」でタバコを分け合う場面が思い出される。同じ境地に追い込まれているとき、清純な和気が包んでくれる。「とき」と切って、以下説明語に嫌味がない。

アドリブの美事に夫婦溝を埋め　小浜　牧人

表現にスキがない。老練。

青春の捨て場ブレーキ軋ませて　月原　宵明

一種の暴走族？青春の特権かも知れない。第三者は思わず息を呑む。

夕焼へ詩人でいたい鎚を置き　三宅　不朽

仕事は終り直前、少し気をゆるめた目に夕焼がすばらしい。思わず鎚を置いた大工さんである。作者が美事にのりうつっている。

流れ星明日は砂丘の砂となる　嘉数千代香

作者の若々しいロマンが羨しい。砂丘へ展開して足が地についている。

言い張って海豚提灯に似た夫婦　久家代仕男

似た者夫婦という言葉がぴったり、怒りっぽく、多弁な、にぎやかな二人が浮んで来る。こんなユーモアは捨てがたい。

連峰に声あり四海波静か　水粉　千翁

新春の晴着が似合う御来迎　板尾　岳人

元旦の希望を雲に泳がせる　嘉数千代香

賀状の年頭吟というものは概ね年末の作、希望を乗せて若干キレイごとに終る率が多い。それでも、各人の意気込みや、人柄がにじみ出ていて楽しい。句のない賀状は何んとしてもさみしい。

さて、句そのものは月並みに陥りやすいがこの句等は佳作の方であろう。

他にチェックした作品

憂国の演説寒き暮れの街　谷垣　史好

おでん屋の前で別れた冬の風　香川　酔々

車座に市長を囲む市民権　藤田軒太楼

イヤリングあなたを意識してゆれる　小島　蘭幸

秀句鑑賞

—水煙抄—

——前月号から——

工藤甲吉

鮮明な記憶過去から這い出せず

川上　富子

忘るべく努めれば努めるほどにかえって鮮明になるのが記憶。なぜか「いとくまなきみ心の性にて」—源氏物語に出てくる言葉や女性（にょしょう）が頭に浮かぶのである。

おこるなと朝の鏡に言いきかせ

樫村ふみよ

自分で自分に言い聞かせているのである。朝は一日の始まりであれば尚更のこと。その心がけが女には特に大事である。

イギリスで大阪弁の胸を張り

佐々木朝代

私の恩師で東京「川柳ながや」の店子・長谷川霜鳥氏に「アメリカの犬をなだめる津軽弁」という句がある。この霜鳥氏と、東京のどまん中の「鮪忠」で一杯飲んだ。亡妻と娘も同席したと記憶しているが、この句と同じく二人はあたりかまわず津軽弁で盛んにしゃべりまくった。と、その時亡妻に〝〇〇人と間違われます〟〝喧嘩と思われます〟と耳元で言われた事をしみじみ懐しく思い出した。

快心の仕事を終えた手を洗う

柴田恵美子

難解な表現が必ずしも深遠な内容を保証するものではない—と、ある大学教授が言った事を覚えているが私も同感であり、この句がよくそれを証明していると思う。誰にも分る句を作る事とは初心時代、川雑の客員でもあった師の小林不浪人からよく言われた事である。ヤッタゾーという句主のその気持が一読ジーンと伝わって来て実に爽快である。

一言がとどめとなって遠ざかる

小谷　清女

〝貧乏人は麦を食え〟と放言して我々底辺にいる者を憤激させた故池田勇人首相の「直而温」という色紙が私の在職した新聞社にあった。「ちょくにしておん」と読み、直言には実のところ温情味があるのだ、というのがその意味と聞いたように思っているが、この句の一言もホントはこの「直而温」ではなかったのか。荒田つる「あらくれの人情しみる港町」もこれに一脈通じるものがある。

男同士飲むものでないレモンティ

高野　不二

少女、恋人、女同士ならいざ知らず、大の男同士がなぜそんな事をしたのか。一人前の男はやはり酒、酒が当然ではないか。

母の日へ母の手助け茶碗割る

野田　君枝

母の日とは限らないが、お手伝いといってうちの小五・小一の孫娘もときたまやる事であるが叱るなどもってのほか。至極微笑ましいことをお爺ちゃんは眺めている。

打明けてよかった世間広く見え

桧垣　岩光

なぜもっと早く打明けなかったものか。三人寄れば文殊の知恵という。文殊は仏の知恵をつかさどる生きた菩薩である。念ずべし。

静けさは父と母とがもめている

那須　鎮彦

右するワケにもゆかず、左するワケにもゆかない家中の者たち。こんな時、娘が孫でも連れてだしぬけに現われたら、たちまち雲散霧消となるのだが—。どこの家庭でもある事。それを逃さずうまくとらえたのが手柄。

お隣りへ一歩さがってまるく住み

井上柳五郎

NHK朝の連続テレビ小説「火の国に」の銀行支店長一家に対する桜木家のそれか。

入れ替えるタンスの底に眠る亡妻

大垣たもつ

「簞笥ひらけば亡妻が匂うて来」総桐の簞笥も中身もそのままの私の場合と、この人の場合は「入れ替える」のだから異るのかな。

ヤンゲには明日も登る山がある

安田　紘

ごうん、と人間の百八煩悩を突き出す除夜の鐘を聞き、若人には未来と展望があり、老人には過去と幻以外にない事を痛いほどに知らされた私であった。若者よ前進又前進。

丸煙抄

川村好郎選

いとしさに壷へいっぱい骨拾う
禁酒して腹の底まで冬になり
霧の中逢曳らしい煙草の火
年金の中で小さく妻と生き
初風呂へ気になることをみな流し

倉敷市　松井俊風

哀しみをしまう器の小さ過ぎ
贅沢な話は耳鳴りの耳で聞く
うかうかと座れば叱られ役の椅子
人ひとり許して歳月重んじる
お袂れに踊るワルツを愛しとも

柏原市　小谷葉子

城跡の壁の白さに居る冬陽
結論は出ぬまま師走の人のむれ
背のびした空しさ笑う包装紙
人嫌いの部屋で人恋う便り書く
妥協点見えず無口になってゆく

和歌山市　西山幸

頼らねばならぬ手摺りの冷たさよ
乱れ菊塔を越えたる自由主義
立冬の仁王　裸の男振り
清しこの夜笑顔の詰まる菓子さげて

唐津市　岩下照沖

眠ったら敵も味方もない世界
白のまま世間を泳ぐのがこわい
時計ばかり見て言い訳が浮かばない
正直に生きよ太陽真紅なり

今治市　渡辺南奉

片意地なとこまで似てる子を案じ
やさしさが禍いとなる女沙汰
主婦専業肩身のせまい世にかわり
おとずれた史跡を土地の人知らず

愛媛県　宮尾みのり

右手骨折
左手で書く柳箋のもどかしく

鳥取市　有田鹿の子

痛い手を遠いでんわの子が温め
なつかしい人に出会ったような野仏よ
処女雪が私の心へつめたすぎ

大阪市　那須鎮彦

金運の欲しいみくじが凶を引く
なぜ、こうも凍付く土へ帰るのか母よ
親と子の差を埋められぬ日記帳
野仏の慈悲北風を許してる

豊中市　高橋古啓

金の世を嗤った金にしごかれる
下を見てあるけば影が落ちていた
青インクこんな泪も滲ませし
血は巡る　ひた走る日も転ぶ日も

大阪市　文川野生

猥談も交えて商談うまくゆき
頼られて頼って妻と酒を酌む
筋書のない人生の気楽さよ
閑の中自分の姿見えてくる

大阪市　欄蘭

無い袖は振れぬ団交行詰り
石橋を叩きいまだに渡れない
控え目な妻の助言に出る勇気
松の内七人の敵と和睦する
苛立ちのない元日の朝のベル

富田林市　中村優

ラーメンをすすり政治を批判する

寝屋川市　江口度

バイタリティ王手の好きな男です
男けり女が拾う石もあり
枯れてなお種子を支えている草よ

鳥取市　岸本無人

潮時のわからぬ雑魚が捕えられ
松葉蟹九号線を冬にする
言い値では買うなと妻に注意され

羽曳野市　麻野幽玄

義兄の死一際わ強く冬の雨
手のうちはいつも受身の黒い石
盆栽にもあった過保護の出来不出来

弘前市　小山内貞男

コーヒーの自販器うれし冬の駅
訥々と話す言葉の人間味
倖せは朝の茶碗を伏せた音

大阪市　小谷清女

雑踏へ心の洗濯しに女
うっぷんを晴らす着物を撰っている
聞いているポーズいらだちおさえてる

島根県　安達潮音

大漁があったと知れる顔と顔
紐落しの孫が晴着の幸をきる
背伸びした暮し意地がそうさせる

科学にも人間味と云う超論理
公海の限界点に世界揺れ
起訴されても最高点という選挙

亀岡市　森　和堂

底冷えに耐えて山茶花咲き続け
落魄の軌跡は本人描いていた
大盛りへ顔を埋めて啜る客

羽咋市　三宅ろ亭

乙女心毛皮も欲しい歳の暮
故里のおつゆ一滴も母の味
元旦に賀友が揃う我がポスト

尼崎市　駒村岳麓

不景気の風吹き溜る屋台酒
朝刊の匂い病室朝にする
冷えかかる地球へ人生観変り

熊本市　有働芳仙

ワンマンで涙にもろいとこに惚れ
倖せは心のもちようだと悟り
極楽に行きなさいと写経入れてやり（姉の死）

松原市　北野久子

冷めたくも温くくもなって宿の寝具
自動巻き働く腕でのみ動き
ゼロ一つ少ないプラスチック買い

大和高田市　岸本豊平次

無駄口をたたいてコースふみはずし
愛情の支えがあると云うゆとり
下積みにたえた苦労をなつかしみ

東大阪市　崎山美子

母死して年賀印刷無駄になり
働いてこの世を去りし母恋し
黒枠の母の写真が笑って居

七尾市　松高秀峰

事務カバン今日のノルマがつめてある
下心あって女の嘘を聞く
亡き父を偲ぶ息子と秋の酒

尼崎市　中塚喜甲

木曾節の聞えて来そうな谷間往く
うつろなる心が灯りを探す夜
ヒーター全開大山の雪疾る

大阪市　松本甫久路

一銭の稼ぎも知らぬペンネーム
年金の足らずを埋める職がない
驚いた素振りも板に聞き上手

尼崎市　中谷利美

胴上げのない還暦を踏みこたえ
差し出せばにこりともせぬ納税課
落選を達磨も片目で泣きたかろ

八戸市　安田紘

タカ派にもハト派にもなる手腕

吹田市　藤原世史春

責任をとるで責任逃げる肚
政治家はクリーニング屋も出来て
下松市　徳光秋人

旅に拾う
資料館栄えし平戸の史を残し
八幡船栄枯盛衰平戸港
尼崎市　小林文月

すべき事たんと抱えて傘寿超し
あと何度出せるか知れぬ賀状出し
岡山市　船越汽水

名が欲しく飴の甘さを売りつける
幸福を祈り祈られてる別れ
八尾市　小川洋子

義姉の色適当に溶けている茶の間
正義貫く青年一途なものを持ち
岸和田市　池田露子

顔作り終えて女に朝が来る
鈴蘭の造花鈴蘭の香を放ち
北九州市　三上春雄

赤字公債我家も出したい年のくれ
老骨に打つ鞭はなし不況風
羽曳野市　岩橋双虎

ボーナスのない正月に慣れて老け
夕焼けの映えて言うまい過去のこと
大阪市　堀口欣一

伝統の工芸守る京ことば
肘ついたまま有難うございます
宝塚市　吉田笑・女

今年も又妻が溜め息つく師走
反省をしたらし今朝の顔の色
松江市　梅本登美也

巫女そつと我が身にふれて涙ぐみ
まん中へ母の手をひく祝膳
堺市　栗本藤持

世辞もなく老舗は売れる年の暮れ
古い夢追わぬ積りがまた想い
島根県　飯塚虎秋

妻だけが共に流した黒い汗
筋道を通せば空気冷えてくる
大阪市　中辻千子

時の流れしみじみ思う松飾り
頑張れと本人よりも母力み
西宮市　山田喜代子

くすぶった壁にも声のある我が家
細首のおくれ毛ロマンの夢さそう
新宮市　西尾功

枯れすすき唄って孤独まぎらわせ
師走風パチンコ玉も忙しい
新潟県　高野不二

忘年会付きの会議の十二月

税務署へ見せる数字のフィクション
鳥取市　勝山紫宏

惜しい人ばっかりが先に逝き
爽やかな弁舌ドシンとひびかない
和歌山市　樫村ふみよ

若人でなくとも船へわくロマン
世渡りが教えた世辞も板につき
大阪市　新川貞祐

窓口で生きてる証しの判もらう
いさかいのあとの髪形変えてみる
橿原市　西本保夫

おおらかな心の方が平社員
何かある課長はボクに遠慮する
大阪市　前川玉子

幸せが続くと神仏忘れられ
もめ事の続く家庭の金欠病
大阪市　内藤ますえ

総選挙白、黒、灰の勢揃い
反省の欲しい男のヘルメット
大阪市　田淵晴子

反省の誓いと下戸の飲まされる
反省の開きの深さ親と子の
枚方市　水野弘

立ち見してるのに予約席空いたまま
今日も無事反省込めて日記閉じ
大阪市　平井露芳

餅つき器最後やっぱり手で丸め
砂出して身を清めてる浅蜊貝
高知県　瀬戸海州

計画はなるほど誰が金を出す
少し位なら出来ますと自信持ち
和歌山市　松原寿子

追随を許さぬ日々へ釘を打ち
虚しさを分け合う海が胸にある
和歌山市　桑原道夫

少年のマスクはやけに大人びる
消ゴムのかす掻きあつめ掻きあつめ
青森県　波ただお

生き方を時計の振り子に教えられ
受験子の家族ひっそり呼吸する
尾鷲市　渡辺伊津志

年取った分　口数を減らしとく
適材が適所に居った汚職劇
出雲市　石倉芙佐子

京鹿の子髪に結んだ夢を見る
雪どけをじっと待ってる紅椿

不景気の片波かぶったらし無口
寝屋川市　柴田恵美子

童謡が唄え仕事の鬼でいる
東大阪市　加藤千代子

五分でも延着証明サラリーマン
無い者にボーナスボーナスと耳ざわり
唐津市　田口虹汀

ギャンブルの好きな男でしみったれ
無理も云うこれも糟糠の妻なれば
唐津市　田中紫浪

酒、マージャン出世コースのゴルフする
ひまと金ゆとりが出来ぬままに老い
唐津市　岩崎実

粗品進呈別の顔して又貰い
行く末は何処のあたり今日もゆく
唐津市　山下勝一

はっきりと不服と云わぬ涙みせ
選挙戦人情からめば強くなり
唐津市　三浦ひろ坊

財布のひも又締め直す自衛策
すべり止めになるか私立へ出す願書
唐津市　桧垣岩光

冷害地来年こそと稲を焼く

肩書きのある仲人に親も折れ
鳥取県　加藤茶人

ボーナス期銀行マッチも置いて去に
青虫のいつかは蝶の夢捨てず
東予市　小山悠泉

善人が自腹を切った後始末
出稼ぎへ蔭膳祈る母が居る
鳥取県　福田靖子

執念の指でマヒの子鶴を折り
慕われた過去へ未練の糸たぐる
豊中市　田中善四郎

ボーナスに羽根つけて来た年の暮
年の暮忘れたかのより景気よく
出雲市　高見鐘堂

一票の重さ軽さも靴は知り
アルファーの中で労使は妥協する
島根県　松本文子

油切れたか手足がグチを云う
アイシャドウひいて心の窓閉ざす
今治市　岡部正則

籠の鳥夢は古巣の青い空
来し方を落葉と語る孤独の身
大阪市　文川一念

ど根性松の木ほどに曲がらない
肝臓がちくりちくりと愚痴を云う
堺市　安井雨堤

柿の色幸そうな山の家
岸和田市　池田香珠夫

月末になると菜食主義になり
出雲市　藤井晴月

竜神の助けを待とう丙辰
出雲市　板垣夢酔

成就せば放してあげよう千羽鶴
備前市　武内雅堂

寡婦献身和合の石を積み重ね
尼崎市　大垣たもつ

親の夢に遠く養子として離れ
山口県　高崎雀声

嬉しい日母は朝からたすきがけ
岡山県　池田半仙

中年の汗素晴しい妻子負う
寝屋川市　福富隆子

愛情を計る物差し売っていず
大阪市　野田君枝

古里のここで汽笛の鳴るカーブ
堺市　堀畑日々子

ボーナスのない寡婦のつつましく
八戸市　島田昭治

エンジンのかからぬ豚児のもどかしさ
諫早市　江副二手

秋風が酒の旨さをささやいた
大阪市　山本炉斉

反省会やっぱり自己が顔を出す
大阪市　須浦つね

亡夫には反省ばかりの妻でした
大阪市　村島秀村

明日の日に期待をもってテレビ切る
今治市　大本パット

車窓から見るたそがれの知らぬ町
広島県　原田篤史

落書の柱に幼き日の想い
倉敷市　斎藤通風

初参り参道虚栄の列となり
滋賀県　柚木踏草

芽生えつつあると感じる愛一句
島根県　岩田三和

ありのまま書いたら母ちゃんしぶい顔
唐津市　桑原掬治

ごま塩を気にして床屋にはげまされ

忘るまじ師走八日に時計買う　羽島市　伊藤静枝

抵抗もなく義母と子の絆　松江市　岡崎雪美

出稼ぎのわれ東京の地下に生き　松江市　黒目大鳥

低姿勢貫く父にあった過去　香川県　田井教之

手をとられ歩けば夫婦らしくなく　大和郡山市　今谷紫園

★

嘘にされむしろその場を救われた　大洲市　米沢暁明

遺書まさに偽りのない人間味

妻どこで覚えた水割りを二つ

コンパクトせわし下車駅もう近い　岐阜市　市川鱗魚

もう泣かぬ女六法全書読む

戦闘開始女鏡へ横坐り

南無歓喜仏は何んにもおっしゃらず

千の鶴折っても消えぬ千の罪

ふだん着の時は漫画のお父さん

雅号ぶっちゃけばなし（156）

しげと　たまき

玉置重人

十数年前、職場壁新聞の川柳欄に投句した時、先輩に雅号をつけるように言われ、その時は迷い抜いたあげく、こんなに迷うならと迷朗とつけていましたが、長いブランクを経て数年前から川柳塔を読まして戴いていると、同じ雅号の先輩がおられるので、後輩が名を変えるのが礼儀だと今度は迷うことなく、本名の一字をとって、重人とした次第です。初めは自分でもなじめなかった雅号ですが、最近では愛着を覚えて川柳以外の時にも使ってしまうありさまです。今後もこの雅号を大切にして川柳をむつかしく感じる今日此の頃ですが、とにかく頑張っていきたいと思っています。

（五十五才・地下鉄駅員）

いずも川柳会創立五十周年記念大会

（昭和2年9月・川柳雑誌社簸川支部）

時　昭和52年6月12日（日）午前10時から

所　出雲市体育館大ホール

大会次第—午後5時終了後—祝賀小宴一時間の予定。

兼題選者—著名作家に交渉中。

兼題六・七題。席題二・三題の予定。

観光地案内—前日または翌日にご出席地の希望に応じて計画中。その他、決定次第本誌へ発表。

6月12日は〝いずも川柳会の50周年記念〟とご記憶のほどを。

愛染帖

正本水客選

野仏も老い給いしか草騒ぐ　尼崎市　黒川　紫香
岩の苔おどらせ渓の水が落ち
又一人減った乗合バスに居る　大阪市　川口　弘生
アクセサリーですよと猫の首へ鈴
なにかをかたりなにかがひかる水平線　竹原市　三宅　不朽
ひたむきな慕情へ雪の降り止まず
気紛れにたたずむ橋は風の道　柏原市　小谷　葉子
似た者夫婦　師走からずれている
まだまだ足の悪い人がいるなと思う町に出て　豊中市　戸田　古方
予報通り冬のあおさになった午後
泡立草　人権差別の如く刈り　柏原市　大峠　可動
スラム街　思想を越えた音がする
少年にストーブの火が赤過ぎる　八尾市　大路　美幸
夕暮れのともしび母の顔をする　八尾市　高橋　夕花
舞い落ちる花びら秋を握りしめ

親切な郵便さんは手に呉れる　高槻市　若柳　潮花
罪の彩消したくて佇つ冬の海　島根県　堀江　正朗
男は早く紋付を脱ぎたくて　和歌山市　西山　幸
誰も知らない優越へ冬を弾み　和歌山市　津田　与史
這いあがる娯しみ墜ちるだけ墜ちて　富田林市　岩田　美代
ノックして木枯　湯加減ききにくる　和歌山市　野村太茂津
禅寺で姦しいのを叱られる　島根県　堀江　芳子
妻の座よ扉の重い日もありぬ　東大阪市　竹中　肖二
うわずった夫へ鎖の重さ撰る　倉敷市　小野　克枝
気まぐれの鬼が拾うてきた羽魔矢　倉敷市　小幡　里風
洗脳が終って猿は檻を出る　鳥取市　河村　日満
安らぎが死の直前によみがえり　神戸市　小浜　牧人
目次には確かにあった勝利の日　松江市　梅本登美也
年笑い合うてわびしい春の冷え　京都市　都倉　求芽
障子張り替えて畳と調和さす　新宮市　大矢　十郎
人嫌い夜中に漫画読んでいる　藤井寺市　西　いわを
九官鳥に軽く図星をさされてる　和歌山市　桑原　道夫
事故現場丸いチョークの輪が残り　八尾市　香川　酔々

小咄がうけて教室乗ってくる　今治市　原田　一風
仏像の光りは鈍く冬を呼ぶ　寝屋川市　小林鯛牙子
近道はもう飽きたよと秋の蟻　今治市　月原　宵明
腹立てて老婆は諸にむせている　香川県　田井　教之
十二月八日もいつか風化する　枚方市　宮川　珠笑
どの道を歩こう六十の交差点　青森市　工藤　甲吉
磐石という石になるしあわせよ　京都市　松川　杜的
風船の夢　大空を漫歩する　松江市　岡崎　祥月
嫁の来た息子に一つ線を引く　今治市　園部　正則
　　松江市　岡崎　雪美

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社　西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二～四
夜間 (762) 四四〇八

政治劇庶民の野次は遠すぎる　島根県　錦織　文子

透明な海を写している孤独　尾鷲市　渡辺伊津志

もの好きな老妻　詩吟も習いかけ　生駒市　草深　酔升

金要らぬ　そんな悪魔にあこがれて　鳥取県　鈴木村諷子

すず虫も寡婦になってから長生し　東大阪市　加藤千代子

いたずらな花はつぼみで散って見せ　大阪市　小谷　清女

冬の川　長靴浸し濡れてみる　羽咋市　三宅　ろ亭

波音へ悲しみ一つ一つ消す　出雲市　板垣　夢酔

恥知らずな井戸には井戸の蓋があり　豊中市　高橋　古啓

あれこれと何を急いでいる私　堺市　高橋千万子

十ほども若く見られて苦が笑い　八戸市　紅　葉山

ジングルベル邪魔な女の立ち話　滋賀県　柚木　踏草

まぼろしの有事とのみは言いきれず　岸和田市　池田香珠夫

チャリティショウ名曲を聴くくれの贅　西宮市　朝山千世子

頼られて背の弾倉が重くなる　八尾　宮西　弥生

正月の夢が散ってる年の暮　山口県　高崎　雀声

精進は路傍の石にしておかず　鳥取県　清水　一保

晩学へ日々に重たき広辞苑　大阪市　西出　一栄

お年玉添えた娘の初便り　島根県　安達　潮音

川柳に魅せられ寒月背に帰宅　東大阪市　竹中　綾女

薄氷　花の如くに金魚の死　唐津市　岩下　照沖

しみじみと歩いて秋の深みゆく　唐津市　岩崎　実

海よりも碧し大空ハネムーン　松江市　黒目　大鳥

防犯灯　寒々としてくたびれる　大阪市　欄　蘭

実の残るみかんの山に寒波来る　唐津市　桑原　掬治

息切れをかぼうて晴れる夫婦坂　倉敷市　水粉　千翁

妻といて鉢植の位置考える　羽曳野市　岩橋　双虎

満ち足りた妻は裸を見せしぶる　和歌山市　若宮　武雄

掌の平の幸せ逃がすまいこぼすまい　和泉市　西岡　洛酔

大売出しのように選挙が走り過ぎ　鳥取市　勝山　紫宏

行く年へ山茶花ホロロホロロ散る　寝屋川市　宮尾あいき

ふる里を持たぬ私のせまい地図　貝塚市　行天　千代

激論に紳士は言葉崩れない　和歌山市　沢山　福水

人前の笑顔は自分の為にする　岡山県　池田　半仙

ためらいを師匠が叱る花鋏　東予市　小山　悠泉

赤字つづく家計薄　紅と小さく書き　大阪市　黒田　真砂

残照に何を観ている老一人　亀岡市　森　和堂

かかわりもない身に怖いもの見たさ　東京都　山根　白星

身にまとうもの美しき大樹氷　備前市　武内　雅堂

入園からこぼれたぐちを溜めてある（堺探訪）　宝塚市　吉田　笑女

大君のくだりは抜いた歌碑が建ち　大阪市　新川　貞祐

消極にブレーキかけてつなぐ明日　和歌山市　松原　寿子

小役人さよならをした屠蘇の味　倉吉市　奥谷　弘朗

この嘘を繕う嘘へ妻の知恵　岡山県　直原七面山

背負えない田んぼ背負って未亡人　今治市　越智　一水

鏡餅太るムードに妻は居ず　島根県　飯塚　虎秋

ふるさとよダムをつくって砂ためる　島根県　岩田　三和

出稼ぎのくぎりもつける年の暮　唐津市　田中　紫浪

次回繰越とする割勘の剰余金　唐津市　松垣　岩光

返事とは別に這い出す肚の虫　高知市　瀬戸　海州

4月号発表分から橘高薫風選になりますが、2月15日締切分から〒560豊中市中桜塚三丁目一三の一五。橘高薫風宛（一人三句以内）

川柳・○と×

同人特集

川柳することにより人生が楽しく、川柳に○をつけたいが、ここだけは×をつけたい。そんなものがどなたにもちょっぴりあるはずである。そこんとこを皆さんにうかがってみた。

（到着順）

★

倉敷市　**水粉千翁**

〝○と×〟川柳での可と不可を訴えよと謂うのであろう。しかしこれは個人の主張であることを前提としたい。それは私に作品も人も含めて川柳界へ決めつけるほどの能力を持ち合わせないからである。具体的な応答は他の同志に任すとして極めて抽象論で責を果したい。

私の川柳道場の十周年記念柳話で柳界の大先輩であるM・Y氏から〝川柳中庸論〟を拝聴して共鳴した一人である。所謂中庸を○と云い、前衛的作品を×とすることであるのは云うまでもない。一部特定の範囲だけに限られる前衛と仮称する作品は川柳だけではなくて例えば書道にも絵画にもそれが云われている。芸術の中での〝美〟の一つをとって見ても、〝美しさ〟を逸脱視して〝こじつけ〟をもって〝新しい創造美〟であるかの如き主張をはばからぬのは実に困った×である。M・Y氏も〝判らぬ川柳は困りものだ〟と憂色をもって述懐されている。それでは判りさえすればそれでよいのかと云えばそれも実は×である。川柳作品とは第三者の視野から極めて安易に〝これが川柳か〟と云われては困る。一片の説明で膝を叩くところに○印川柳の真価があり、中庸の心があるのである。川柳人としての自覚と川柳創作への洗練さが望まれる所以がそこにあると云えよう。

川柳塔の作品を引用して○と×の論議をせよとのことであるが、前記の如く私にはその能力と勇気がないのが残念である。ただ私の作品観は前衛を否定することを貫ぬくと共にそれよりもなお×としたいのは〝古色蒼然たる川柳〟への憤りであり、〝その通り川柳〟への陳腐さである。即ち心だけを固執するの余り、折角文芸（文学）の一角に道が拓かれようとする川柳の姿を忘れては×と云わざるを得ないではないかと云うことである。

中庸の心で難かしさに向き直り、楽しさを求める川柳の追究をつづけたいのである。

★

鳥取市　**河村日満**

むつかしい標題をもらって、ちょっと閉口している。何故かと云えば、○と×とかは、誰がみても、誰に聞いても、良し悪しがはっきりしている場合に、限りそうに思えるからだ。しかし僕のような者に書け、ということは、それほど大ゲサに考えることもなく、気軽に、ということだろうとこっちなりに受けとらせてもらった。また一地方に住んでいる僕のことだから、中央の柳界のことはよく判らない。まして不勉強の僕に、最近の「句風は」「川柳の範囲は」などと謂われても、そんなことを語る資格もないし、才能もないことも申し添えておいて。

まず、川柳大会等における選者の選句時間を考慮する必要はありはしないか。と書いてきて、当県柳界で行なわれている大会における、僕の大嫌いな点を思い出した。

その一は入選句に対する採点方法である。他県では概ね入選句を一点としており、同点数の場合、三才佳句の入選順によって、上位

下位を決めているようだ。ところが当地では三才三点佳作二点前抜き一点はまだましな方で、所によっては、天位五点地位四点人位三点佳句二点などと、前抜き句に対し格段の差をつけていることだ。大体誰の案でいつごろからこんな採点方法がとられているのかは知らないが、そんなに三才天地人と前抜きに差があるのだろうか。よく二人選、三人選でAの選者の天位が前抜きに、いや没句にもなりかねない現状で、この採点方法は僕がもっとも嫌いなところである。

その二、各題三才にまで賞状が手渡されることである。そしてその三は、と書きつづけたいが、すでにスペースがきた。舌足らずのペンは誤解を生みやすい。まして、一度書いたものを、縮めに縮めた文章ほど読みづらいものはない。あしからず。

★

和歌山市　**野村　太茂津**

「○」とはYESのことで、明るい面を指すもの、と勝手に解釈して此処では触れぬ。（書けば私の嫌いな「阿（オモネ）りと諂（ヘツラ）い」が顔を見せるので）・「×」つまり「否」の闇の部分を剔り出して見よう。

だが紙数が二枚では残念、柳話のチャンスでもあればブチまけることにして、無論自己反省の立場からホンの一部だけ提言したい。

私が川柳わかやま・を葵水君の死後を承けて三年半を過ぎた、石の上にも何とやらで、自慢をすれば葵水と二人でやっていた三年間よりも、人口が増え続け、内容も充実しつつある、私の方針に誤りは無かったんだ、と云う自信（ひとりよがりかも知れぬ）で一歩宛前進する決意である。多くの先輩柳友達の忠告と援助も取捨撰択して肥料とし育てて行く方針には些かも変りはない。

吟社という集団は世に云う営業会社ではない仲間であり、家庭である。好きな者達が寄り集まり、川柳しているんだから一人一人が力を合わせなければ前に進まない。

主人が一人居て他は皆お客のつもりでは吟社は活動不能である。

そこで各人のそれぞれ助力が必要になる。この根本のことが理解出来なければ本当の川柳とは云えない。川柳は洞察だと云われる、深く洞察し理解出来たら、今から直ちに行動に移そうではないか！

助力とは奉仕の行動であり、言葉だけのものではない。

此処まで云えば、賢明な読者は洞察してくれるし、一々具体的に説明の必要もないと思う。句会の準備・運営・進行の一ッを取りあげて見ても以上述べた簡単明瞭なことは解ってもらえると思うのである。

料理を食って塩加減を批判するのは容易であるが、吟味して作って膳に乗せる人の心と裏方の努力も解らない人は、食う値打ちがない。本社もまた各地柳壇の集まりであり、吟社が集まって本社を形成していることも又解ってほしいものの一つである。

そして、柳友とのすばらしい出遭いを求めて寄り集まるのである。よき哉川柳人生！

結びは「○」になったか。

★

岡山県　**直原　七面山**

引き止めるために農家の自家用車

という句が、何年か前秀句鑑賞欄に取り上げられ、その評に〝久し振りに訪ねて来た友達が、もう遅くなったから帰えると言うと、農家の主人は、まだいいじゃあないか、終バスに遅れたら家の自家用車で送らせるから・・・〟といった意のことが書かれているのを見て私は驚き、早速柳友数人に電話をして〝この評如何に〟と尋ねてみたところ、みんながみんな〝理解に苦しむ〟とのことだった。

それもその筈なんです。いわばこの句は一種の時事でもあったのですから。

その頃田舎の農家では、跡取りの息子が農業を嫌い、収入も良くて娯楽も多い都会へ都会へと先を争うようにして出て行ったものです。そこで各農家では、そうした息子達を引き止めるため、分に過ぎた高い買物ではあったけれども、デラックスな自家用車を買い込み、息子達のご機嫌を取ったのです。この句はそうした田舎の農家を襲った嵐のような社会現象の一駒を捕え、そのために悩み苦しむ父親達の心情を見事に詠い上げた誰れが見ても実に立派な佳句だったのです。

さて、私は常に〝句評〟の〝鑑賞〟の良否というのは、一にかかってその評者、鑑賞者がその句を通して、句主の句境の真実の姿に

如何により深く入り込んで行くことが出来迫り得ることが出来、しかも如実に描き出すことが出来るかにあると思っております。

従って、句の上っ面だけを見て、如何にも知ったかぶりに通り一遍の句評を試みることは、これ程句主を侮辱し、これ程愚かしくもまた無益で無駄で無価値でしかも無意味な行為は外には無いと思っております。

とは申しますのもの結局句評ということについては、その評者の人間的な修業の浅深さと、人生経験の多寡と、そしてその人の持つ知識の貧富さというものが最後には〝ものを言う〟のかも知れませんね―。

★

大阪市　山川阿茶

小倉百人一首が静かなるブームだと聞いております。只お正月と云うだけでなしに、何故?、結局歌の世界でも新しいもの、より新しいもの、ああでもない、こうでもない、或一点まで来れば「ゆきづまり」と云えば叱られるかもしれませんが昔のものにもこんなによいものがあったのだと気がついて見直し考え直すのじゃないでしょうか。川柳の世界でも同じ事が云えるのじゃないでしょうか。おかしみ、皮肉、穿ち、ペーソスを尊んだ川柳も短詩型であるため例え句想は変っても字数に制限があるため重復して来る事も考えられます。だから珍しい表現、珍しい単語とあっちから「これ」こっちから「これ」と鋏と糊でつぎはぎしたような句を作らねばならなくなるのじゃないでしょうか。感覚の句とやらも御自身は勿論判っておられるのでしょうけれど十人がよんで十人正解出来るのでしょうかね。老化の一途を辿る私の頭では少々説明して貰っても納得ゆくかどうか疑問です。抽象画家や幻覚患者の描いた画体中に眼が四つも五つもあるような画を見ているような気分ですね。

本質を失わぬ進歩であってほしいと思います。

下手くそだと云われても古いと笑われてもよろしい私の道をゆきたいと思います。

おかしみも皮肉も穿ちもペーソスもない川柳なんてサビぬきのにぎりかおさしみのようじゃありませんか。これは私の錯覚でしょうか。

にぎり鮨トロにケチャップ添えて出し　阿茶

★

大阪市　本多柳志

住宅を建てる以上に子が生れ
行く先はあなた任せのスケデュール
お悔みの次　お目出度に早替わり
答弁に味をつけては　叱られる
死んでから　よく見てくれと胸に言い

憲法学の黒田教授、歌人としての黒田知事を知ってる人は多いと思うが、川柳作家としての黒田さんを知ってる人は、案外少いのではないかと思う。冒頭の五句は一九七三年三月知事就任三年目の黒田了一句集からの抜粋である。之らを通して公人黒田さんの動静が、うかがえて仲々の名吟だと思う。何故に川柳家黒田知事を引き合いに出したかについては私なりに訴えたいことがあってのことである▽毎年十月十一月の頃には地元大阪市をはじめとして、八尾、岸和田、堺其の他の都市では、文化祭参加の市民川柳大会が催される。これらの大会に参加出席して感じることだが群部の中小都市に比べて大阪府市共催になる大阪の大会が一番盛り上りのない、活気に欠けた白けたものになっている。これにはいくつかの原因や理由があると思う。実は以前に柳志が本誌に「市民川柳大会への提言」を寄せて警告をしたことがある。其の中の二三は実行改善されているようだが、未だ実行されてないものの大きなものに、宣伝の不足がある。本誌十二月号に同人新之助氏が同じことに言及されている。「会場には立看板一つなく、会場に迷う人もあったようだ。入口に大きな看板を揚げて、自由に入場出来る雰囲気を作って置けば、通りすがりの人でも覗きに来て、市民川柳大会の名の通りもっと会場が盛り上って」云々。其処で再び提案する。今年からは府市公報、バス、地下鉄内の吊り広告、市内要所への立看板等をフルに活用して貰いたい。それと最後にもう一つ、川柳作家黒田知事を作家としてでも、来賓としてでも其の出席を是非実現したい。黒田さんの出席がどれ程この大会の宣伝効果にけだし大きなものがあろうと思う。又このことは改選期の迫った黒田さんにも、大きなプラスになることは疑いないと思うがどうであろうか。

★

大阪市　小出智子

先日ある方が「この頃、句会で天位になる句に死を入れた句が多い」と話されていたことがある。

幅広く、あちこちの句会へ出かけられるから、そう感じられたものと思われるが、川柳を志すものにとって、この程度でよいということは許されるものでなく、歳月を重ねるに従って、それぞれのやり方の中で自己の川柳に対し、物足りなさと苛立ちを感じるものである。それによって、人間の生きざまの中で愛憎を乗越えての、極限である死というところまで、昇華されるものであろうと思う。

死を扱ったものが、よいということではあり得ない。

むかしむかし稼げば楽になりしとか
秋風の中で乞食に拝まれる
ああ大空生れては死に生れては死に
火葬場は火をつけてから夕涼

と須崎豆秋さんも、貧と死に対して、おどけたようなユーモアの中にも、生き身のひたすらな思いを、句にされている。

しかも、いとも平明に、むつかしい熟語など全く使わず、一句の余韻を、ほしいままにしている。

いろいろな傾向の柳誌も沢山あるが、それらを如何に消化し、よい面だけを吸収するかが、これからの課題ではないでしょうか。

時代の移り変りと共に、川柳雑誌時代と、川柳塔になってからの句風が随分変って来たとよく聞くが、それより、私を含めて「ここがこうして、こうなった」式の川柳は卒業して、真剣に作句するよりほかはないと思う。

「川柳○と×」と言うよりは、自分に言い聞かす心算りで書きました。生意気なことをお許しください。

★

八尾市　香川酔々

十二月十二日五右衛門風呂に柚子を入れ

板尾岳人氏の作品である。この句席題だったと思うが、入選したかどうか詳かではない。

しかし、とにかくおもしろい。氏が、句箋に、十二月十二日と書き出したので、それは何の日だと尋ねると、「誕生日だよ」「そうかなかなかうまい趣向だな」一二一二といえば、百済から王仁が、千字文を我が国に伝えた、いわゆる仏教伝来の皇紀（応神天皇の御代）である。戦前の歴史教育は、皇紀を用いて、西暦は殆んど用いなかった。仏教がオィチニ、オィチニと伝わって来たと、年号を暗記したことがある。それで、一二一二がとくに印象深かったのである。次の趣向は、五右衛門風呂である。もう都会でも田舎でもお目にかかることは少なくなってしまった。「東海道中膝栗毛」で、弥次さん、喜多さん、五右衛門風呂の敷板を、風呂の蓋と間違えてとり去る。入っている中に熱くなり、庭下駄を見つけて、それをはいて入り、やがて風呂の底を踏み抜いてしまう。愉快な場面である。次は五右衛門である。「古今武家盛衰記」に…文禄四年の頃、石川五右衛門といへる奥州石川の者、大重科人にて、後京都へ登り、猶諸人を苦しむ、大閣、京都所司代諸国の守護に命じて、擒にし、其母並に同類廿余人迄搦捕り、三条河原に於て烹殺さる…とある。

五右衛門の誕生日が十二月十二日で、岳人氏の誕生日と一致すれば、なおさらのこと愉快であるが。

十二月十二日氏は誕生を祝して、柚子を入れたが、五右衛門の方は、釜茹されるとき果して柚子でも入れて貰えたかどうか。不幸にして記録には残っていない。

でも、この句は趣向に富んでて、おもしろい。だから川柳はおもしろい。

★

大阪市　天正千梢

川柳に対して私の場合は、ヘタの横好きと言う方が叶っているかも分りませんが、川柳にぞっこん惚れていますので、毎月川柳塔誌の到着が待ち遠しくてなりません。

毎号変った表紙で楽しませて下さる直原先生の絵をいつもまんじりともせずに暫らく眺め、それからおもむろに、頁を開ける習慣です。そして諸先輩の句にウーンとうなり、かたずを呑みながら読んでいきます。

時たま分りにくい句に出くわす事もありますが、それは十人十色という事もあり、其の方は又それなりに勉強しているんだと思っています。とは言うもののよその川柳誌の事を

思えば私たちの川柳塔は理解に苦労するような句は少いように思っています。むずかしい言葉を並べた一人よがりの句よりも、やはり誰にでも分る句の方がよいのではないでしょうか。皆さんの句を読ませて頂きながら、私なりの人生修養をさせてもらっています。

路郎先生のおっしゃった、「いのちある句をつくれ」の言葉には程遠いですが、私なりに頑張っているつもりです。

そしてまた毎月の句会場に早くから来て色々とお世話下さっている受付の方や其の他の方々には、いちいち申し上げませんが、そのご苦労を感謝しています。これら陰の協力のおかげで句会もつつがなく続けていけるんだと思っています。紙面をかりまして改めて、お世話下さる方々にお礼を申し上げます。

編集部から言われました事に対して答になっていないかも分りませんが、私は川柳塔の句風といい、句会のあり方にも満足しております。

★

大阪市　**河野君子**

川柳の流れの底に沈む、砂利にも似た私にペンを執れとおっしゃる。

「こんな難しいテーマ、よう書きません」

「へのへのもへの」でもよいと云うことで及ばずながらペンを進めることに致します。

ある日の句会のこと、選者として披講してゆくうちに声が詰まってしまいました。それは解らない句を抜いていたからです。今更没にもならず、一応は読み終えたのですが、人に問われた時の答えの用意に、心の中ではその解明に必死でした。そして帰りの道すがらその時の難解句が、私には解るのだと、自問自答を繰り返したものです。しかしよく考えてみると自信のないままに、おどおどしながらの選者の役と、自分の掌にある句箋の重さを感じながら、一枚一枚めくる同想句にうんざりしていた矢先、変った句の出遇いにほっと救われた思いだったのです。一瞬の安らぎの中で、何かに惑わされていたのでしょうか。そんなことがあってから、同想句の罪深さと、それが如何に魅力のないものかを知りました。そして選者を惑わす一手を知ったのです。ところが此の一手、いまだに身につかず、苦吟にあくせくするばかりで、個性らしきものの無い私など、ああ、あの人の句だと、直感出来る句に、羨やましきもひとしおで、今更ながら個性の尊さを思い、早く、「貴女らしい句」「らしくない句」と云われて見たいと思います。

兎も角もしっかりした基盤の上に、自分のものを打ち立て、かりそめにも選者泣かせの句にならぬよう、心せねばと思っています。

「川柳、○と×」皆さんに、大きな×を貰いそうな、この、「へのへのもへの」所詮は自分自身への誡めと、希いに他ならぬことを付記して、ペンを置きます。

★

兵庫県　**遠山可住**

川柳塔51年度秀句抄に目を通しながら、自分の句の古さと鑑賞力の貧しさをつくづく痛感する。うまいなァと感嘆する句と、あっと心にひびく句がある。前者の句を拾ってみると、

染め替えて羽織は過去を喋らない　美代
千手観音の一手が枕母眠る　酔々
ところてん大きなよろこびなどいらぬ　智子
花らっきょ小皿の中を逃げ廻り　世史春
てのひらの温みも投げたお賽銭　スミ子
ぬいぐるみ温い童話のつめてあり　甦光
陽の長さタイムカードは持たぬ妻　克枝
冷戦の膝とも知らず猫が来る　カズエ
夏痩せて妻の寝息を聞いている　美幸

後者の句としては

完璧な駒組み自ら動けない　史好
秋に咲く桜をふいと憎くなる　葉子
鳥が鳴く方へ振向く軽い罪　岳人
階段に噂が落ちている団地　史葉
浮き草も流れてるうち花が咲き　勝一

などがある。特にこれら後者の句は私には作れない句ではげしく詩心をゆさぶられる句である。そして私の鑑賞能力はこの辺までが限度で

教会のローソクだから揺れはせぬ　鬼遊
お早ようと豚はやさしくささやいた　潮音

になるともうわからない。

私の知っている朝の豚は腹をすかしていて誰でもよい、人の顔さえ見れば金切り声を発して餌をねだる。決してやさしいささやきなどの類いではない。ましてこれが「豚児」の

方向へなどとても回転してはくれない私の頭である。

私の篠山句会はおとしよりの楽しみ句会ではあるが、塔誌「秀句鑑賞」を毎月句会の研究題材として、ゆっくりゆっくり目標へ励んでいる。

★

八尾市　**高杉鬼遊**

川柳の作品発表の場として、句会の存在を否定することはできない。現代どの吟社に於いても句会は重要な事業として定期的に催されている。それぞれの方法、特色、定め等はあっても、基本的には変わらないものである。これ程重要視されている句会でありながら、それに比例した努力が払われていないのが大方である。これはひとり主催者側の問題だけではなく、これに参加する柳人に於いても注意すべき事柄でもある。

気のついた基本的なことを、句会の順序に従って書いてゆく。

一、作品提出締切時間。

どこの句会にあっても締切時間は、予告又は会場に提示されているが、なかなか実行され難い。時間を厳守するにはお互いに甘えがあってはならない。

一、入選句発表。

その会の定めにより一度読みと二度読みがあるが、時間的に許されるならば、二度読みを希望する。句は目で読む場合と、耳で聴く場合とあり、句会のあり方は後者の魅力であって、誤読又は聴きとり難い発声は、作品の価値を低め句会の雰囲気を損うものである。

一、呼名、復称。

簡単なようでなかなか難しいらしい。先生が生徒に注意するように〝大きな声ではっきり〟と何処の句会でもよく聞くことであるが会場に居合せながらなかなか呼名が返って来ない。読み終った時点で即座に呼名があると楽しくなるもので、選者も呼名を待って次へ移って欲しい。二度読みの場合は、一度読みが終った時点で呼名を待ち、呼名があって後に二度目を読み、記録係が復称する。作品のリズムと同じく句会のリズムも大事にしたいものである。

誰でもが知っている事で今更と思われるが実行されていない事なので改めてペンをとった次第である。

★

竹原市　**三宅不朽**

昔も今も大差のない現象かも知れないが、柳界のウィークポイントは、若い作家を希少価値的存在にのみで終らせている事にある。

常に未完成の上り坂の途上を競い合い、その展望に眼を見張り逞しく可能性への挑戦を挑む。若くみずみずしい青年の血を輸血しないかぎり、柳界の老化を見るのみで、発展は望めない。青年の在るところ青年が寄るのである。その彼等がどのような過程を歩むかは判らないとしても、起爆剤となり夢を抱かせて呉れることは確かであると思う。

「川柳の総合誌」をの声を聞いて久しい。現在なお無い物ネダリに等しいがその発刊が待たれてならない。その理由の一つに、「専門家」なき世界は発展がないと思うからである。

他の短詩型・書花茶・等の何処を見ても、それぞれの分野において専門家として立つ事により、「生活の基盤」をそこに持つことが出来るので、生涯を賭しその道に打ち込めるから、より評価される結果を見出して行くことが出来るのである。

柳界はどうであろうか、専門家らしき存在はあっても、専門家は存在しないのである。「生活の基盤」を別の場所に持たなければ、「川柳では食えない」のである。この事は、川柳への傾斜を深める事が生活環境の破壊を意味することになり、いきおいその活動は制約を受け、労多くして片手間的なものとなるから、専門家を自負して立つ事も育つ事も出来ないのである。こうした現状が川柳の地位向上を遅々とさせている要因でもある。

「総合雑誌」の発刊をみることが出来れば商業ペースに乗せる事が出来るのではないかという期待と、そうなれば必然的に専門家を必要とするであろうし、そこに、「生活の基盤」を持つ専門家としての活動が生れ、前記の問題も徐々にではあっても解消され、川柳の持つ可能性を期待できると思うのである。

柚子の里

西尾　栞

京都駅の一番はしっこに忘れられたようなホームがある。そこが国鉄山陰本線の始発のホームである。

十時二十分発の、どんこう列車の最後部に私等二十二名がドヤドヤと乗りこんだ。丹波口、二條、花園、嵯峨、と四つの駅で、薫風さんが長男の充君と一緒に、手を振って乗って来た、充君は唯今小学校六年生で来年は中学へ進学するので、今朝は早く家を出て、嵯峨の虚空蔵さんへ、十三詣りをして、この一行に加わったのである。途端に列車内は賑かになった。次に停った駅は、保津峡という無人駅であった。若い後部車掌に切符を渡して跨線橋を渡ると、上りのホームの下は保津川の断崖で、その断崖にしがみつくように、型許りの無人の駅舎があった。そこをぬけてダラダラと降りると、さっき跨線橋から見えていた、百米余の吊橋がかかっていた。

保津の流れは、ここに淀んで少し下って曲ると、急湍になっている。素晴しい良い眺めである。

紅葉紅葉吊橋かかるここ秘境　栞

初冬には珍らしい暖かい天気で、一同の顔は晴々としていた。

橋を渡ると、迎えのマイクロバスが二、三台待っていた。私達のうち、年輩の者の十二人はこのバスに乗って、あとの若い人達は、四粁の道を保津の流れに沿うて山路を辿って行った。

歩くこそ値打ちの道を野暮なバス　形水

トンネルを抜けて、あわやと思う絶壁を二三度過ぎると約二十分にして目的の柚子の里水尾に着いた。

ここ水尾は現在四十戸程の農家許りであるが、郵便番号六一五の京都市右京区に入るのである。

柚子の里京に田舎と言い得たり　牧人

ここの部落の殆んど九割までは、松尾姓でさつきマイクロバスに乗るとき、松尾さん迄というと、何処の松尾さんどすと訊かれたので、姓だけしか知らぬ私達がとまどったのも無理はなかった。

木守柿　村に松尾の姓多く　酔々

バスに乗った組は皆より早く着いたので、オーバーと鞄を置いて早速、清和天皇の御陵へと参拝した。

この御陵の参道は一度谿へ下って、水尾川のせせらぎを渡って、苔むした山道を上って行くので、道案内に書いてある十五分というのは、普通人には迚も無理のようである。

参道の棚田には、猪垣があった。

猪垣のこわれしところどころかな　栞

小松園さんは、そのこわれた猪垣を持ち前の技術で繕うていられたのは洵に殊勝の至りであった。

猪垣の棚田に重なり砦めき　栞

御陵は森の中の断崖にあって、御陵墓監もなく、ひっそりと鉄棚の中に低い土を盛り上げていて、清和天皇にふさわしい御陵であった。

清和天皇は九世紀の後半の天皇であるが、藤原良房の専横で、長兄の惟喬親王をさしおいて生後九ヵ月にして皇太子（惟仁親王）になり、僅か九才で帝位につかれた、謂わば、藤原氏政権維持の為の悲劇の天皇であった。兄惟喬親王は人生に絶望して、出家され、天皇は兄親王の為心苦しさに耐えられず、やがて大極殿の放火による炎上を最後として遂に皇位を捨てて、出家してこの水尾の山の奥深く入って、仏道に専心された。

それがため、天皇の御子は親王にされず、臣下に下して源氏の姓を賜った、世に清和源氏の始まりである。

今この御陵の辺りから山里に吹く木々の風は、若き帝の悲しい息吹きのように感ぜられる。時に帝は三十一才であった。

山陵に詣ずる我は甲斐源氏　栞

愛宕山都忘れぬ夢枕
御陵より淋しきものに冬芒　鬼遊酔々

ここは流石秘境だけに、四十軒程の家は、左家、右家のどちらかに属している、そして氏神祭（清和天皇社）の時には、席を定めるのに、左家の者は左座、右家の者は右座というふうにきめられる、又右近、左近、とよばれる家も揃っている。これは帝について来た近衛兵の家である。

それから清滝道と水尾道の合流点に、花売小屋があって、ここで愛宕山清めの樒を売っている。売子の茶の前垂は榛の木で染めたもので、平安初期の女官の袴に因んだものという。

この里は又南天のよく育つ土壌で、大きな赤や黄色の実南天が戸毎の門端に、暖かい冬の陽に映えていた。

大粒の南天の実の重さ見る
喪中の身赤南天に背むかれる　薫風君子

御陵から、帰ると、歩いて来た人達は、既に到着していて、今日のお目あての柚子風呂に入っていた。湯殿の階段まで来ると、柚子の良い香りがして、所謂、この香りは日本人の嗜好と離れがたいもののあることを知った。湯槽は木の枠で囲んだ風呂で、之又柚子風呂の名にふさわしいなつかしいものであった。

柚子の枝母屋へ反むく方へ伸び
湯桶にもゆかしい香り柚子の里　小松園漫柳
柚子風呂に都塵の落ちる音がある　幸生
日めくりを逃げて柚子湯に身を浸す　美幸
いかき干す小門をくぐり柚子の風呂　柳太
恋人に見せたい柚子の風呂上り　弥生
柚子有情女は楚々と香をまとう　夕花

十二月十二日五右衛門風呂に柚子を入れ　岳人

今日は十二月十二日で、石川五右衛門が釜ゆでにされた日であった。それである地方では、十二月十二日と短冊型の紙に書いて、家の入口の柱の裏に逆さに貼って、盗人除けの呪いにしてあるのを見かけることがある。十二月十二日であるのと、五右衛門の命日とかけたのである。

句会は丁度二時に終って、それからこの里独特のかしわの水煮の食膳についた。丁度先刻から腹の虫が鳴いていた時とて、一杯のビールの美味しかったことは云うまでもない。

水煮に柚子湯のほてり丁度よし　栞

土産に柚子を買い、柚子味噌を求めて、村を辞した頃は、手に手にもった南天の枝も、冬至に近い暗さとなっていた。

川柳集団

大阪府立生野ろう学校高等部
西田柳宏子

この原稿は府立生野ろう学校で二、三年前から川柳句集「トンボメガネ」を詫間宏道先生の指導で出している中から抜き書きしたものである。

この学校はさきごろ五十周年を迎えた歴史と伝統のある全国ろう学校のトップレベルを行く聴覚障害児の学校で、幼稚部から高等部専攻科までである。

生徒たちは幼くして、あるいは先天的に聴覚を失っている者ばかりだが、みんな明かるく健聴者の学校となんら変わったところがないのである。

日頃、彼らは、口話、指文字、手話、その他、手まね、表情等々を用いて生活をしているが、一番苦が手とするのは読み書きであるそうである。

いろんな面で、健聴者より苦労の多い毎日ではあるが、外に向かっての眼、内に向かっての眼を育てるもの、人間教育の一助になるものはと、常から心をくばっておられる前記詫間宏道先生と川柳の話をしたことから、川柳の勉強がはじまったのである。

最初は五七五にもならず、おかしみだけを追ったり、冗談めいたものばかりになり、または先生や、両親、友人らの中傷になったりして、その出発はさんざんだった。

しかし、そんな中から、川柳句集「トンボ・メガネ」を出した。そして第二句集も出すことになり、今、第三集の投句を募っているのである。

昭和29年二学期にはインフレ化の危機の中での作句、タイヤキブームからロッキードの黒いピーナッツ事件にまで、彼らは川柳によって世情批判の思いをブチまけている。

私は感動した。稚拙ではあるが、彼らの句を紹介しよう。

（P51へ）

消防車

河井庸佑選

消防車車庫でねむって街平和　軒太楼
そこのけとばかり消防車が走り　正則
消防車へ噛みつきそうに朝の雪　甫久路
強風になす術も無き消防車　七面山
元旦の朝も素っ飛ぶ消防車　本蔭棒
消防車のサイレンかすかに夜が更ける　晴子
消防車はいれぬとこばっかりが焼け　方大
消防車の行方見ている市場篭　隆子
消防車やっぱり一寸あわてる　不二
消防車夫婦喧嘩に水を差し　一郎
消防車ラッシュを裂いて突走り　春日
奮戦のあとまざまざと消防車　カズエ
どうにもならぬ火の海の中消防車　豊生
虹二つ作って訓練派手に終え　伊津志
火事えんえん消防車まだ続き　回天子
消防車火の手は見えぬビルラッシュ　英詩
出稼ぎの女世帯に消火隊　静枝
消防車手のつけられぬ火を眺め　芳仙
はしご車が巾を利かせたビルの火事　悠泉
消防車師走の街を掻きまぜる　宵明
乾燥へ神経尖らす消防車　肖二
消防車いたずら電話で走らされ　綾女
消防車不吉の音を撒いて行き　どんたく
化学には化学で向う消防車　通風
七色の水を飛ばして出初式　敏
駈けつけて火元を探がす消防車　貞祐
消防の音で近所の火事を知り　国彦
消防車夕餉の箸をちょっと止め　度
消防車焦り野次馬も焦り　太茂津
佳
一人前のサイレン消防車おもちゃ　古方
ずぶぬれて帰る消防車の汗か　里風
消防車地獄で仏ほど待たれ　バット
消防車街を起こして遠ざかり　岩光
宿題を中断させた消防車　素身郎
人
消防車今日訓練というゆとり　茶人
地
無言で走れば消防車頼りなし　翁童
天
消防車野次馬連れてやってきた　無人

花嫁

原田一風選

ニッコリと
出て来た美女に
ホットする
（信二）

関西奇術教室

きれいやな花嫁姿へ声が洩れ　春日
花嫁になってジャジャ馬ウソ見たい　昭治
あんな男にやるのは惜しい角かくし　英詩
倖せさこんな花嫁探し当て　白水
もう夢は追わぬ覚悟の角かくし　秋女
花嫁を送った後に腹が減り　藤持
花嫁に朝日がまぶしい朝になり　思月
花嫁も実家へ帰える投票日　木魚
花嫁は頷ずくだけのインタビュー　里風
婿さんをもう花嫁は目で指図　方大
花嫁の知らぬ事までほめておき　無人
花嫁がほっとして立つ衣裳がえ　代仕男
花嫁を見送る父の肩がおち　弘朗
花嫁の旅を見送り父孤独　正則
花嫁の笑顔へ父は淋しそう　双虎
父の掌をするりと花嫁ぬけてゆく　度
娘を嫁かせ空しさ埋める知己を訪い　静枝
礼を言う花嫁姿他人めき　右近
子が一人増えたと花嫁迎え入れ　鐘堂

花嫁は父母へは頭下げたまま　回天子
嫁ぐ娘の涙母親そっとふき　虹汀
花嫁へ母言い足らぬことがあり　双虎
花嫁さんのせた祝儀は別にのけ　悠泉
花嫁もひと日ですんだ年の暮　俊風
白無垢を着た日歴史の一頁　宵明
ウエディングドレスの夢に長い春　優

花嫁の耳学問が邪魔をする　伊津志
花嫁へより美しく母願い　甫久路
さまざまの花嫁駅を華やがせ　豊生
花嫁の幸がしみている貸衣裳　茶人
そもそもの馴れ初め花嫁しゃべらされ　洋々
花嫁へクラスメートの目は険し　漫柳
花嫁の子が花嫁の裾を持ち　方大

佳

からかってやろう花嫁泣きそうだ　踏草
花嫁の今日を待ってたシッケ糸　白水
正直なところ花嫁無我夢中　古方
白無垢に女女の夢を描き　美紀子
花嫁の白の重みを母に聞く　道子

人

泣き顔を見せぬ花嫁フト憎し　ひろ坊

地

花嫁へ老父はやっと物を言い　ろ亭

天

花嫁を才媛にする名司会　重人

軸

シャンデリア今日の花嫁日本一

吟題課

豆まき

遠山可住選

豆まきへ子の無い夫婦二人きり　豊生
ひっそりと女世帯は豆をまき　登美也
豆まきに今日生きた幸年を読み　藤持
豆まいてことしの幸を神だのみ　掬治
内職の窓へ福豆はねかえり　芳仙
値上りの豆少なめに鬼やらい　潮音
社内にも豆をまきたい鬼がいる　本蔭棒
老妻と豆まきをして笑い合い　弘朗
豆まいて倖せそうな窓に見え　俊風
園長の鬼を子が追い豆が追い　洋々
幼稚園へ買う豆まきの一袋　保
福は内去年も福は来ずじまい　大方
豆まきの桝も古びて居る旧家　国彦
暗闇に鬼のいそうな豆をまき　実
人波の背の福豆を拾いけり　照沖
鬼の子がまかれる豆が腑に落ちず　重人
大阪は通天閣から豆が降り　敏
黒・灰の鬼も追い度い豆を撒く　みのる
節分の豆へ不死身な鬼笑い　思月
豆まきの姉は不遇なカルテ持ち　春雄
豆まきに日本の春はまだ遠し　英詩

川柳塔柳箋

一冊百五十円
送料二百円

政界に向け豆まきがしてみたし　素身郎
豆まきのそこまで鬼がきてるよう　古方
古式豊かにアメリカの豆をまき　香珠夫
年男不作の豆を派手にまき　軒太楼
父がした通り今年の豆を撒き　悠泉
小学の子が居るからと豆をまき　一進
春の顔して年男豆をまき　どんたく　茶人
豆まきで厄払いたい日の落目　紫宏
宿題のための豆まきさせられて　保夫
豆まきも勿体ないとまだ不況　道子
豆まきに借金もある福男　佳

豆まきを古典落語で聞いてくる　肖二
停年はいいもの豆をまいて見る　不二
保育園の方で豆まきやって呉れ　七面山
豆まいて昔のよさに二人ふれ　宵明
豆まきを嗤える鬼が多過ぎる　太茂津

人

豆まきの豆を豆屋は炒りつづけ　白水

地

マイホーム出来て豆まく気分よし　一風

天

豆まきの豆の入ってる靴を履き　木魚

軸

豆まきも確かにやって留守まもる

初歩教室

題 ―「策」―

本田恵二朗

私は全くの音痴でもなさそうに思っているが、お世辞にも歌がうまいとは言えそうにないことも自認している。歌は聞くものだと思って、専らテレビの歌番組に聞き惚れているが、歌手たちがそれぞれのレパートリーを実に大切にしていることに感心する。自分の持ち歌には血が通っているのであろう。従って精一杯に歌い上げるのだ。しかも自分の訛りを強調して、物真似をやらない。つまり個性を十分に表現しようとしているところが、プロとしての誇りでもあろう。

われわれの川柳の道と似通う点があるとつも思う私である。自分の訛りや節まわしを生かさねばならぬ点が特に似通っていると思う。川柳街道をあきず歩き続けているうちに個性臭がプーンと匂いたって来るようになる又ならねばならぬことである。サア頑張り続けよう。

金繰りに百策もつきすがる易　岳麓
（金策の不首尾が易の灯を見つけ）
策略の手の内見せず乗せている　那智子
（策略を笑くぼでかくし乗せている）
（策略がひょっとこ面を着て踊る）　同
一人娘の万策つきた婿選び　保夫
（婿探し鐘も太鼓も疲れはて）
万策もつきはてベンチへ唯一人　同
（つきはてた策がベンチに寒う掛け）
政策は減税にまでふみ切れず　同
（減税政策もたもたともたもたと）
策士様策におぼれて自滅する　昭治
（自称策士策におぼれて浮き沈み）
半生は策にはまったこと多く　同
（策に泣き策にはまったわが半生）
参謀の策あまかった選挙戦　鐘堂
（参謀の策達磨の目入れそこね）
策もなく出たとこ勝負が好きな父　同
（策も無く出たとこ勝負で生きる父）
策授け糸引く大物裏にあり　藤持
（黒幕の指があやつる策の糸）
策立てた知恵の人には金はなく　同
（金は持たぬが良策をくれた人）
金バッジ黒い秘策も共に胸　貞祐
（金バッジの裏で秘策が黒くいる）
こざかしき策をむなしと思う齢　同
（こざかしい策を見透かす年の功）
タイミング外され策が宙に浮き　江水
よい思案浮ばぬままに年の暮　同
（よい策も浮ばぬままに年暮れる）
策よりも真心出せと亡母の鈴　静江
策をもつ男で心開かれず　同
（策秘めた男へ心開かれず）
応急の策に溺れて倒産し　俊風
（泥縄の策に溺れている斜陽）
策あると知りつつ母はだまされる　同
（子の策へ母ニッコリとだまされる）
労せずにうまい策略処生にし　静江
（策士かな濡れ手に粟の処世術）
商品は目玉にひかれ奥にあり　同
（商策が目玉商品ちらつかせ）
腕組めば他人さまには策と見え　紘
（腕組めば策練るポーズと受取られ）
万策尽きても男の意地で立ち　同
（万策が尽きた男が意地見つけ）
策士家へ口のチャックを閉めて寄る　夢酔
（口のチャック閉じて策士と対座する）
策練って待ったが罠を嗅いで逃げ　同
（良策か罠かとそっと嗅いで逃げ）
不況対策講師は不況を知らぬ人　久栄
策つきて窓を細目に開けてみる　同
策士ふと淋しい夕陽だなと思い　双虎
策のない話へみかんたべ終り　同
（策のない話へみかんばかりへり）
策戦は策に敗れたことと知り
（策と策敗れた方が僕だった）
策つきて女の虚栄崩れる日　正則
金策と不況のかけっこ根くらべ　同
（愛妻の無口策戦に負けている）
おしろいでかくせぬ策を胸にもち　日々子
ライターの炎の中で策を練る　同
さりげなく策あり二枚指定席　同
（指定席二枚に策を秘めている）
悪い友の策あるところ酒が待ち　同
（悪友の策スナックの匂いする）
ゆき当りばったり策などはなし　三十四
（行き当りパッタリ策など考えず）
耳打ちに見事王手の策が立ち　同
（目くばせに王手の策を貰い受け）
膝叩き男の策が出来上り　同
善後策どころか責任回避策　利美
（善後策どころか責任なすり合い）
罪人を出すがいやさの善後策　同
（罪人を出すまい黒い善後策）

流れ星思案に余る夜は長し　文子
（見つからぬ策へ冬の夜冷えまさる）　同
国策の流れは苦い水ばかり　漫柳
策略の通りに運び気味悪く
（策略の通りに運んだ気味悪さ）
策を練るコーヒー冷めてから飲まれ　同
（策を練るコーヒー冷たく放っとかれ）
親方の策にうなずく猿芝居　功
宝くじ無策の顔が列作る　同
万策がつきた紫煙のむなしさよ
（万策のつきた紫煙の輪がいびつ）
踏まれても雑草の意地策を練る　同
（雑草の策踏まれても踏まれても）
疑えばみんな策持つ顔ばかり　幸
策を練るための幕間に騙される　同
（策を練る幕間にまんまと騙される）
対策は考慮中だという政治　同
逃げ道も策もないまま時が逝く　同
（策のないまま逃げ道を踏み迷い）
策のない男に西陽突き刺る　鎮彦
笑われる策練っているピエロ　同
（爆笑と拍手呼ぶ策練るピエロ）
理論派の策が冷く突いてくる　同
（理論派の策には冷たい刺がある）　寿子
当てのない金策不況の風が泌み
（当てのない金策嗤う不況風）　同
ゆとりある秘策へ軽く咳払い
（老獪な策を秘めてる咳払い）　同
女三人策を練ってもたかが知れ　同
溺れたる策立直る策を立て　柳五郎
（策に溺れサテ立直る策もがな）
金策へあがれあがれに切り出せず　同
（マアあがれあがれへ金策切り出せず）
社運をギリギリの打開策にかけ　同
（ギリギリの社運へ打開の策を賭け）
浅知恵が所詮溺れる策を練り　健二
従皺がまだゆるまない打開策　同
（打開策眉間の皺がまだ固い）
おねだりへ可愛いい策を練っている　同
策略の過信に墓穴掘らされる　静泉
（策略の過信が墓穴を掘っている）
最善の策練っている隙つかれ　同
（目下策戦中の虚を衝かれてあわて）
賛否とるとこで得策考える　同
（賛否のどたん場で得策考える）
実力の無さ爆露して策終る　伊津志
（実力の無さ見抜かれて策終る）　同
炉話の策はつまずく方へ向く　同
（炉話の策つまずく方へ堕ちてゆく）
学者馬鹿策を授ける方がバテ　同
弱腰へ策を授けて押してやり　無人
善後策親もあきらめ式を挙げ　同
馬を射てサテそれからの策がない　同
一か八苦肉の策が図に当り　慶彦
とりあえず臭いものには蓋の策　同
石投げた波紋へ策士ほくそ笑み　同
種明しすればなんだという秘策　同
商策は持たぬがもみ手知っている　通風
国策もなくロッキードで年が暮れ　同
一計は愚策に終り日が暮れる　同
策に溺れる深淵には網が無い　露杖
策尽きて尻をまくったくそ度胸　同
信じ合うころ策略寄せつけず　同
金策に来て内紛を聞かされる　同
策謀に勝って民意にそむかれる　同

題―青―2月20日締切（四月号発表）

宛先　〒七一一　岡山県倉敷市下津井一―九―三四

本田恵二朗

（47頁から）

恋の夢もてない人はあきらめる　木下洋子
かがみ見て彼に見せたいおふりそで　岡田善子
狂ってる今の世の中どう変える　戸田真由子
いちばんに日の丸の旗　お正月　中島真貴子
五円だま投げていのる年はじめ　布村美恵
見えないとこたつの中であぐらかく　橋本典子
今年も節約ムードの文化祭　的場典子
メガネかけメガネをさがすお母さん　渡辺博
酒のめば犬とふざけるお父さん　森田満津子
自分のことみないであいてを批判する
好きな人に好きとも言えぬ男の子　若生茂嗣
友人と別れるのがいや卒業式　吉武美知子
あわい夢　せつない心をさめないで
これからはぼくも働くなかまいり　横手孝行
校庭をはずかしげに歩く新入生　唐巳俊彦
夕立や殿様がえるが目をほそめ　渡辺博
先生の思い出多く卒業す　的場典子
卒業だ仕事もきまりもう大人　橋本典子
あとわずかばらばらになる友達と　和田安子
南風　梅もえがおでこんにちは　内田裕子
長い列今日も買えないたいやきよ　布村美恵
ロッキード　ピーナッわたしもたべたいな
人間の反応さまざま五つ子の記事
かくれんぼ指の間でそっとみる　渡辺暢子
からっぽのかばんをもってかっこつけ　大西政子
にわか雨恋がめばえるかさの中　牧野弘
現代っ子Vサインで卒業し　詫間宏道
送別会　先生の手のあたたかさ

第三百七回（五十二年度第一回）

大萬川柳「つづく」入選発表

選者　川村好郎

投句総数　五百六十五句
入選　六十四句

続柄一応妻と書いておく　西宮　多久志
栄光の椅子待ちつづけて来た派閥　和歌山　富子
国境を知らずにつづく空の青　泉北　春栄
傘寿なお若返りする夢つづく　笠岡　古庵
再会へ無言がつづく手の温み　鳥取　茶人
つづくまいと思う目もあり被露宴　松原　重人
限りなくつづく青空青春よ　岡山　翁童
茨の道つづけど寡婦にも明日の夢　大阪　真砂
憎悪しつづけてる愛を捨て切れず　寝屋川　恵美子
ちぐはぐな歩中でつづく夫婦仲　羽曳野　幽玄
倖せにつづく道なら走ろうか　大阪　好一
宝くじ皆当てる気の列つづく　堺　一二三
以下次号女に薄い幸つづく　八尾　酔々
その続き石のつぶてとなって飛び　富田林　花梢
感激の言葉がつづかない握手　堺　天笑
ゼンマイのつづく限りを演技する　東大阪　肖二
それからの点滴つづく日の長さ　寝屋川　小路
なにつづくものかと云われファイト湧く　大阪　満津子
続く海領海などは知らぬ魚　大阪　晴子
転落の嘆き故郷へつづく思慕　西宮　百酒
命つづく限り働き蜂になる私　大阪　蘭
オアシスにつづく軌條のない砂漠　守口　笑風
好調がつづいて足が浮いている　大阪　道子
二人して歩けば花の道つづく　倉吉　弘朗
三代ののれんにつづくかくし味　和泉　洛酔
金婚までつづいた山をふり返り　和歌山　与史
ふる里の温みへつづく駅の列　八尾　美幸
定退になってもローンついてくる　大阪　貞祐
雨三日つづく山谷の恨みうた　堺　憲祐
値上りがつづき財布も笑いだす　八尾　鬼遊
グリム童話夢までつづく子の寝息　和歌山　寿子
幕切れの裏につづいているドラマ　大阪　君子
ふり向けばそむきながらも子がつづく　西宮　洋敏
あの人を想いつづけている日記　川西　つき子
故郷へつづく山河母に見え　岡山　白水
導きの貴方へつづく歩の確か　平田　代仕男
道標もなく人生の坂つづく　和歌山　寿子
色あせた夫婦につづく長い夜　箕面　一本杉
空白のつづく日記にある温み　貝塚　つき子
日々の闘い不況の風熄まず　神戸　牧人
見え隠れする倖せを追いつづけ　和歌山　幸
降りつづく雨に小石を積み直す　鳥取　静泉
しきたりを守りつづけて過疎に生き　八尾　弥生
胎動がつづく絆を編んでいる　大阪　智子
羽根のばす旅にふところつづかない　平田　代仕男
奥儀なお無限につづく芸の道　岡山　白水
やりくりに追われながらも夢つづく　鳥取　露杖
かかる世に水の清さを持ちつづけ　佳句
生涯を月のまろさを持ちつづけ　佳句
四十年敷かれつづけている平和　佳句
賀状だけつづけてやっと継なぐ縁　佳句
よう続きますなと老いをいたわれ　佳句
幸せがつづいて神を疎んじる　佳句
逢えぬ日がつづいて疑い深くなる　佳句
この父につづけと言える職でなし　佳句
巣立つ子へ大空果てしなくつづく　佳句
確かなる愛陣痛つづきだし　佳句
暗闇がつづけど夫を信じきり　佳句
悔いがつづくそれでも明日を信じよう　佳句
続編が欲しい昨日の巡り合い　佳句
流し台乾き女の旅つづく　佳句

おふくろの小言つづきが多すぎる　八尾　酔々

居心地がいいのか姑居つづける　西宮　喜代子

祝いごとあんまりつづくのも困り　大阪　道子

倖せがつづくエプロン白く乾し　奈良　本蔭捧

人ノ句

地ノ句　鳥取　茶人

その続き運命線でたしかめる　富田林　花梢

天ノ句

果てしなくつづく大地と知らぬ蟻　羽曳野　幽玄

選者吟

つづけたい善意我欲が邪魔をする

昭和五十二年度ベストテン（一月現在）

一	幽玄	五、〇	羽曳野
二	静泉	四、〇	鳥取
三	花梢	四、〇	富田林
四	智子	三、〇	大阪
五	一本杉	三、〇	箕面
六	茶人	三、〇	鳥取
七	道子	二、五	大阪
八	酔々	二、五	八尾
九	白水	二、〇	岡山
一〇	代仕男	二、〇	平田
一一	弥生	二、〇	八尾
一二	幸	二、〇	和歌山
一三	牧人	二、〇	神戸
一四	つき子	二、〇	貝塚
一五	鬼遊	二、〇	八尾
一六	寿子	二、〇	和歌山
一七	君子	二、〇	大阪
一八	洋敏	二、〇	川西
一九	憲祐	二、〇	堺
二〇	本蔭捧	一、五	奈良
二一	喜代子	一、五	西宮
二二	露杖	一、五	鳥取

昭和五十二年度第三回

「机」五句以内

締切　二月二十五日

第四回

「ゆとり」五句以内

締切　三月二十五日

投句先

〒593　堺市堀上緑町一―三―七

藤井一二三方　**大萬川柳係**

★

第二十四回大萬川柳大会

日時　二月二十七日午後一時

会場　大萬

詳細川柳塔一月号参照して下さい。

★

NHK川柳募集

課題「風」　ハガキで三句以内

締切　二月十日　選者　川村好郎

投句先

〒540　大阪市東区馬場町

NHK近畿本部

「老後をたのしく」係

発表は二月二十六日（土）NHKラジオ第一放送朝九時十五分の〝老後をたのしく〟の時間です。

序　中島生々庵

抜　西尾　栞

川柳塔六百号記念

麻生路郎先生の不朽の名著

「旅人」とその後の作品を収録してここに再現しました。

52年5月8日発売　頒価千円（送料共）

編集スタッフ―橘高薫風・谷垣史好・高杉鬼遊・香川酔々・板尾岳人・不二田一三夫

華道関西未生流家元

籠島総甫

教室　西宮市北口町七ノ九　電話　六七―六二三六

教室　尼崎市武庫庄浅堀　一五七―一八　電話（06）四二三―一四五〇

教室　尼崎市武庫之荘三丁目　一五―一三　武庫之荘文化会　電話（06）四三一―〇七一三

柳界展望

（原稿締切毎月末）

だった。

▼高橋操子句碑建立川柳会の兼題、岡橋宣介氏選「菊」の軸吟は、「しやんとして菊一輪を活けてうれしい日」

▼第8回奈良新聞川柳大会—とき・二月六日（日）午前十時。ところ・やまと学舎（奈良市西木辻町）—題—海・鍵・縁・面・墨・顔・増・席題二題（各二句）締切正午—会費千円（発表誌呈・投句料五百円発表誌呈）投句先—奈良市北市中町七一、杉野睦朗（二月四日必着）主催・奈良新聞社—後援・奈良県川柳連盟。（雀踊子氏が選者として出席）

▼津幡川柳会合同句集「さんさ路」頒価二千円が発刊—創立大正四年という『津幡川柳会』が六十周年記念の合同句集である。美本好著。前田義風氏、故松島みどり葉氏はじめ二十五氏の二百余頁に句が光彩を放っている。発行所—石川県河北郡津幡町興津「津幡川柳会」

▼川柳宮城野12月号に「十九平柳樽」を泉きよし氏が書評として執筆。恵二朗氏の文も紹介されている。

▼高鷲亜鈍氏（藤村青一・寝屋川市）は1月5日付「備北新聞」に新春放談を執筆。さすがに名文である。

▼第8回川上三太郎賞作品募集・作品（新作一人五句）投句締切2月20日。賞として大野風柳作品半折・副賞として一万円。投句の際七百円同封。記念品贈呈・発表誌ご希望は他に三百円

秋田実主宰　不二田一三夫編集
漫才
第5号発売中　定価三百円〒二百円
〒544　大阪市生野区勝山南1の14の17
漫才作家くらぶ

〒956新津局私書箱15号柳都川柳社。

▼第14回三重川柳大会が3月13日、津市新町一洞津会館で開催。雑詠ハガキに3句、2月20日締切。宿題—市内・竹・太い・ヒット・休む—欠席事前投句辞退。〒516伊勢市八日市場町4の2橋本征一路。

▼柳宴一月号で51年度優秀作家を発表。菊花石賞「ママの目を見なさいダメといっている—奥田六条」ほか九句。同「こうあるべき妻の態度をよそで見る—加藤美保」ほか九句。柳宴抄賞「再会へ昔の恋はもう燃えず—作間花子」ほか九句。同「コンビナートの灯を美しく恐ろしく—水津妙子」ほか九句。

▼中野懐窓氏（竹蔵・横浜川柳社主幹）は昨年12月15日、八十歳のご高令で逝去。「川雑」時代にはよくご執筆いただいた。合掌。

▼鈴木九葉氏（神戸市・ふあうすと川柳社主幹）は昨年十二月二十九日午後八時。心不全のため死去、行年六十九、葬儀は三十一日午前十一時から須磨区高尾台の集会所で営まれ、多数の川柳人がお見送りをした。川柳塔を代表して薫風

が焼香—温容にして剛直、作品の良さと文章のうまさに定評のあった生前の氏を偲び、冥福をお祈りした。

▽同人の動向△

▼橘高薫風氏（豊中市）は「柳都」一月号に〝今月の柳花集から〟を執筆。路郎・紋太両先生の名言をプロローグにされている。

▼奥谷弘朗氏（倉吉市）の句碑が本年中に二基建立される。（本誌参照）

▼八木摩天郎氏（堺市）は一月八日11時15分に郷土史家として毎日テレビに出演された。

▼河村日満氏（鳥取市）から—町内会長役の区長を一年間おおせつかり、また川柳が出来なくなるのではと心配ですと。

▼本多柳志氏（大阪市）は「小説新潮」二月号川柳欄（近江砂人選）に第一席に入選「名刺交換して開戦のラッパ鳴る」

▼尼緑之助氏（出雲市）から—山陰中央新報紙の私の選で、特賞「崩れそうな誓いを妻に支えられ—堀江正朗」年度賞「太陽に目鼻を書いたら父になり—岩田三和」でした。

▼大路美幸氏（八尾市）は川柳天守閣・豊岡・瀬戸記念句会で特選「マスコット抱いて少女は風と逢う」を獲得。

▼岡崎祥月氏（松江市）から—退職金の一部をさいてささやかな煙草店を出しました。「たばこ店よく売れることうれること」祥月。

▼不二田一三夫著「川柳寄席」が日本出版貿易株式会社を通じて米国議会図書館から注文があり、どのようなルートからか、頭をひねっていると。

▼板尾岳人氏（富田林市）の厳父が12月18日八十四歳のご高令で天寿を全うされた。顔の広い岳人氏だけに川柳人が多く参列された。「ひとり旅振り向かぬまま頭陀袋」岳人。

▽2月の句会△

▼菜の花句会は10日夕6時から西郷会館で開催。（八尾神社境内、近鉄大阪線八尾下車南へスグ。会費三百円、題—音楽・マッチ（燐寸）・雪・残る—席題二題・各題五句。投句は郵券百円同封。投句先〒581八尾市高安町北1の25大路美幸。

▼堺川柳会は12日午後6時から八木摩天郎居で開催。題は—踏む・豆・区切り。

▼南大阪川柳会は20日午後6時から松崎町三丁目大萬で開催。題は—垢・窮屈・整う・和解。（川柳福引あり）

▼川柳東大阪は26日午後6時から東大阪市立中央公民館二階第二集会室で開催。題は—北風・裏話・自惚れ・冷える。席題一題。投句は竹中肖二宛

▼直原玉青先生はNHKの2・3月の毎火曜日10時30分から水墨画講習の講師として活躍されることになった。

×

▼第24回大萬川柳大会が2月27日に開催されるが、故松江梅里十周年追悼句会ともなる。

新同人紹介

那須鎮彦（すなしずひこ）

—肖二・栞・小松園・推薦

花　公栄社

富田林市富田林町24—4

TEL 07212 ③2064

本社一月句会

会場　金属会館
七日　午後六時

昭和52年本社句会、初の顔合わせである。「おめでとうさん、本年もよろしゅうに」の新年のご挨拶があちこちに、のどかな会場風景も明かるい。

与呂志・重人・敏諸氏の受付けトリオも早目に出席、準備は万全、ご苦労さん。

出足も好調で、イスが足りず句会部の人たちはイスの補充に大わらわである。それでも足りないのでロビーにはみ出す始末だ。今年の本社句会も春から縁起がいい。特に和歌山の太茂津氏がまたまた新しい人を連れてきてくださった。和歌山勢11人という新春プレゼントである。

短冊交換の世話役を今年も村田瓢太氏が引き受けてくださった。

まず生々庵主幹の挨拶は、本年五月八日は六百号記念、麻生路郎先生の13回忌厳修、旅人普及版刊行など、各委員はご期待に添うよう努力していることを報告され、柳話の好郎副理事長は、例の話術の妙を生かして、多彩な〝おはなし〟で会場を魅了する。

NHKの〝老後をたのしく〟を聴いた人の義母へ対する孝行物語は一篇のドラマであった。

51年度の月間賞杯永久保持は小出智子さんにきまった。51年度全出席は32名。傍島静馬は実に24年間連続出席だ。生々庵主幹の色紙と賞状が主幹の手から授与された。

52年初の月間賞杯は草深酔升氏だった。

（進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊）

出席―重人・敏・与呂志・滋雀・雅風・道夫・潮花・静馬・一三夫・幸太郎・水客・肖二・綾女・右近・寿美子・漫柳・雀踊子・多久志・与史・維久子・好一・柳志・とし子・夕花・千万子・百酒・瓢太・川狂子・花梢・太茂津・和子・武雄・英子・公子・きみ・幸・誓二・一舟・勝美・文秋・智子・君子・静歩・天笑・喜美子・蘭・形水・喜風・いわを・儀一・酔升・作二郎・凡九郎・鎮彦・あいき・美幸・千梢・博泉・亜成・度・一二三・吸江・三十四・柳宏子・としよ・栞・牧人・史好・酔々・鬼遊・岳人・恒明・珠笑・一念・野生・生々庵・幸生・つき子・小松園・庸佑・〆女・頂留子・薫風・弥生・葉子。

席題「ポチ袋」　津田　与史選

ポチ袋仕舞う手つきの早いこと　吸江
早々の賀状目当てはポチ袋　百酒
ポチ袋だけに威厳のある旧家　漫柳
将を射ん矢がつめてあるポチ袋　寿美子
タイミング迷うて帰るポチ袋　きみ
片言の年始にはずむポチ袋　太茂津

51年度月間賞杯・永久保持者は小出智子さん。

中川滋雀（一月）高杉鬼遊（二月）野村太茂津（三月）大路美幸（四月）小出智子（五月）岩田美代（六月）宮西弥生（七月）傍島静馬（八月）香川酔々（九月）正本水客（十月）小出智子（十一月）樫谷漫柳（十二月）敬称略。

小出智子さんは二回天位になり、その二回がいずれも月間賞杯という効率のよい天位でした。

（有信新之助）

★

51年度全出席者。二十四年間連続出席の傍島静馬氏をはじめ、塩満敏・中川滋雀・橘高薫風・岩本雀踊子・板尾岳人・香川酔々・菊沢小松園・河井庸佑・西田柳宏子・横地雅風・若本多久志・欄蘭・高橋千万子・高橋夕花・西尾栞・樫谷漫柳・竹中肖二・竹中綾女・西川誓二・草深酔升・城一舟・笠原吸江・村田瓢太・宮西弥生・戸田古方・神谷凡九郎・小浜牧人・大路美幸・小谷葉子・江口度・児島与呂志。（敬称略）

川柳塔創立いらい無欠席の不二田一三夫氏が10年間で終止符が打たれました。

（児島与呂志）

中川滋雀氏がトップ
―51年本社句会ベストテン

谷垣史好

五十一年（一月～十二月）本社句会の入

ポチ袋予定の数だけ取りに来る　英子
子にかける期待で重いポチ袋　千寿子
大人びた年始へ祝儀入れなおす　太茂津
ポチ袋一枚だけかと言う妹　維久子
ポチ袋二才は可愛いい絵だけ見る　としよ
ポチ袋貰えば帰ろとぐずり出し　庸佑
ポチ袋中身の額で見直され　和子
ポチ袋開口一番おめでとう　一念
店先きに売れ残ってるポチ袋　一三夫
移り香が少し残ってポチ袋　酔々
ポチ袋去年の悔が入れてある　水客
子には子の予算があったお年玉　柳志
ポチ袋不景気やなあと囁かれ　吸江
ポチ袋の柄も伯母の芝居好き　栞
帯とけば四、五枚落ちたポチ袋　多久志
ポチ袋長靴履いたままもらう　岳人
ポチ袋せめて新札いれておこ　度
ポチ袋中味が効いて来た素振り　酔升
一万円に胸を張ってるポチ袋　文秋
ポチ袋今日のドラマを組みたてる　花梢
持てるだけ持てばはしゃぐポチ袋　雅風
気の利いた幹事手早くポチ袋　酔升
ポチ袋中味忘れたのを貰い　儀一
片言の孫も欲しがるポチ袋　夕花
その中味ニッコリさせたポチ袋　柳宏子
ホステスに舌打ちされるポチ袋　形水
板前にも出る粋人のポチ袋　雀踊子
ポチ袋チラリやんちゃもかしこまり　儀一
サービスのバランス崩したポチ袋　漫柳
ポチ袋捨てて乳房に這うてくる　静馬
ポチ袋予定外のが一人居る　度

サヨナラともう言うているポチ袋　凡九郎
五つ子へ目出たく五つのポチ袋　千寿子
ポチ袋良い子になった顔でとり　滋雀
ポチ袋枕の下で夢になる　夕花
ポチ袋坂を一気に馳けてゆく　作二郎
ポチ袋継母の匂いがついてくる　天笑
ドサ廻りの哀歓ポチ袋の重味　与史

席題「和装」　高木幸太郎選

初めての和装の前が打ち合わず　美幸
緊張の和装へ仲人よく喋り　幸
商魂はアグネスラムに和装させ　幸生
盛装の女を縛る紐の数　鬼遊
ローラボー美貌は和装でも似合い　一二三
親の見栄娘の見栄和装派手になり　柳宏子
国賓の和装の佳人花を持つ　文秋
玉砂利の和装の女に初日の出　与呂志
紋付きの和装も似合う父の酒　川狂子
ウソ一つ抱く和装には見えず　弥生
じろじろと値ぶみされている和装　庸佑
着崩れぬ急所を母のコツで締め　滋雀
振袖を着てもやっぱりよう喋り　吸江
和装した娘にふと亡妻の影よぎる　君子
和装するその襟足にある日本　凡九郎
着かざった和装同士に散る火花　右近
こっぽりの鈴が嬉しい孫の供　公子
人形になって着物着せられる　三十四
ふだん着の和装女の過去のぞく　一念
妻少しやせて和服が似合い出し　君子
花束を手渡すだけにする和装　吸江
歌い手の和装の値ぶみする茶の間　右近

選ベストテンは次のとおりで、滋雀氏と夕花さんが激しいトップ争いの末、滋雀氏が一点の差で第一位となった。滋雀氏は一月句会で月間賞杯をとって幸先よいスタートを切り、毎月コンスタントに得点を重ねられたが、その上、天位獲得が五回であるから、質、量ともに文句のない首位と云えよう。夕花さんは十一月までの集計では滋雀氏と同点であったが、惜しくも及ばなかった。しかし昨年から引続いての活躍は立派。席題2＋兼題4＝6×三句×十二ヵ月＝二一六句だから、お二人とも堂々の三割打者というわけだ。

二十位までの顔ぶれを見ると、十四人は昨年と同じである。潮花氏のカムバックと新人寿美子さんの奮斗が特筆される。

☆**五十一年ベストテン**（敬称略）

①**中川滋雀**（六十九句）
②**高橋夕花**（六十八句）
③**不二田一三夫**（六十句）
④**正本水客**（五十九句）
④**大路美幸**（五十九句）
⑥**傍島静馬**（五十七句）
⑦**高杉鬼遊**（五十五句）
⑧**小浜牧人**（五十二句）
⑧**岩本雀踊子**（五十二句）
⑩**若本多久志**（五十句）

☆なお十一位以下二十位は
⑪維久子（四十九句）⑫酔々（四十八句）
⑬花梢（四十七句）⑭潮花（四十六句）
⑭寿美子（四十六句）⑯肖二（四十四句）

しっくりとこなす和装に炎えるもの　天笑
祇園街お座敷姿を追うカメラ　和子
しっくりと和装が似合う京言葉　一三夫
チャップリンに着物を着せてみたくなる　天笑
停退のそれから和服で朝を起き　栞
女二人やっと和装の旅に決め　滋雀
お袋の襟に明治の線があり　漫柳
和服着た娘を連れて父が照れ　としよ
他人さんの晴着ばかりを縫う夜なべ　静馬
追羽根に初春の袂をひるがえし　牧人
着くずれたままで振袖手をつなぎ　一舟
たとう紙ゆっくり仕舞う女の詩　酔々
振り袖で来た場違いを持て余し　水客
和装が似合う女玉の輿に乗る　与史
初釜へ和装の青い目もまじり　酔升
あの手この手和装の強い野球拳　幸太郎

兼題「蛇」　菊沢小松園選

満腹の蛇はとぐろを巻いて寝る　登美也
蛇や蝶に悲しい女の化身みる　清女
実弾も日照権も言わぬヘビ　柳信
年賀状の蛇にも二枚目三枚目　東天紅
び"つくり箱蛇がとび出るお元日　一栄
執念の蛇体は美女にもどれない　寿美子
巳の賀状みんな愛せる蛇であり　公子
蛇の皮入れても財布痩せたまま　好郎
いつ来ても動いてくれぬ錦蛇　潮花
へびにはへびの温もりがある蛇つかい　天笑
蛇の道は蛇同じところに穴がある　好一
袂れた日から胸に住んでる白い蛇　幸太郎
蛇年の蛇は可愛い"く書いてある　一念
空の広さを穴からのぞく蛇となる　維久子
祈られているとは白蛇の知らぬこと　美幸
冬眠へ蛇はゆっくり新春をきく　岳人
春を忘れた蛇が化石になっている　鬼遊
財布には皮しのばせても蛇ぎらい　幸生
蛇つかい首はしめないコツを知り　公子
蛇好きもあって世の中面白い　綾女
冬の蛇白いピアノを弾いている　作二郎
迷わない蛇は横道などしない　弥生
巳様でいるうち蛇も拝まれる　英子
冬眠の間にヘビの年になり　与呂志
ねむりつづける蛇を起こさぬように雪　作二郎
笛吹けば踊って蛇が憎めない　牧人
蔵の中に棲みつく蛇は許される　牧人
靖国の記憶の中で食べた蛇　重人
脱皮した蛇は昨日をふりむかず　としよ
クレオパトラの蛇は気の毒だと思う　道夫
裸婦を巻く蛇は獣になりきって　天笑
子の竿に蛇はゆっくり向きを変え　珠笑
脱皮してそれから蛇は考える　岳人
脱皮してから考える蛇となる　つき子
蛇になる恋もむかしはありました　美幸
年賀状蛇も穴から顔を出す　幸
巳年へ蛇はつぶらな目をみはり　柳宏子
古里の蛇はのんびりとぐろまく　度
ぽたん雪蛇のねむりを深くする　天笑
蛇の眼になるとき女負けている　水客
柳ごし蛇の精だと思わせず　小松園

兼題「雑煮」　若本多久志選

雑煮餅下手な歯医者が憎くなり　登美也
ふる里の雑煮が夢に寮の朝　清女
佳き年を願う雑煮のまるい湯気　一二三
民宿で祝う雑煮にあるいわれ　綾女
生かされて祝う雑煮へ悟り持つ　静歩
ポックリの功徳か雑煮で昇天し　和子
お雑煮どころかゆうべの屋根の雪　史好
頭芋の雑煮なつかし京の宿　静馬
雑煮餅施設の子にも初春がくる　滋雀
寄宿舎の雑煮をせめて熱くする　智子
お雑煮へ母系家族の猫が居る　栞
保釈金積んで雑煮の箸をとる　酔々
亡母の味継いだ雑煮に初春が明け　滋雀
御本家で祝う雑煮の順がある　雀踊子
たより無くたった二人で喰う雑煮　一念
自家製の芋も祝っている雑煮　漫柳
城持ちの縁起を祝う雑煮箸　幸太郎
生甲斐を雑煮にかけて祖母達者　喜風
賢兄も愚弟も同じ雑煮餅　酔々
たくましい成長雑煮の餅の数　美幸

⑯一舟（四十四句）⑱君子（四十一句）⑲柳宏子（四十句）⑲岳人（四十句）
不二田一三夫氏はこれまで一位か二位を守りつづけてきたが、第三位にダウン。やはり全出席しないと、句道に乗らないのかも知れない。
☆天位入賞二回以上は次のとおり。
▽五回＝滋雀▽四回＝水客▽三回＝太茂津、肖二、吸江、酔々、美幸▽二回＝静馬花楷、鬼遊、一舟、作二郎、智子、君子、弥生、鎮彦、古啓。

清貧を偲ぶ雑煮の幸を嚙み　太茂津
故郷捨てて母の雑煮を恋しがる　つき子
雑煮だけ嫁にまかせぬ母の味　庸佑
出稼ぎの蔭膳雑煮が冷えてくる　寿美子
かたかたと入歯が笑う雑煮餅　公子
二日目の雑煮は嫁の里風に　千寿子
事件待つ記者が囲んでいる雑煮　酔々
離婚して自由の女になる雑煮　弥生
振る舞いの雑煮が温くい釜が崎　一三夫
旅先でホームシックになる雑煮　つき子
雪はしんしん雑煮は母の味がよし　智子
胎動へ雑煮ゆたかに祝うなり　夕花
正月の紙面へ暗い老の餅　きみ
元日や旅の雑煮に座を正す　水客
お雑煮のサービスうれしラブホテル　天笑
逝った子の歳も数えてやる雑煮　つき子
大阪に住み馴れました味噌雑煮　肖二
あつあつのお雑煮お地蔵さんへ届け　寿美子
除夜の鐘雑煮の数を聞きにくる　滋雀
元旦の雑煮へ正座する帰省　天笑
ひとり旅雑煮の箸も北の宿　小松園
お雑煮が待ってるくにの切符買う　天笑
一番に父母と書く雑煮箸　幸太郎
刑務所の雑煮一味うら淋し　多久志

兼題「二十歳」　西尾　栞選

芳紀二十歳父に溜め息つかすほど　どんたく
二十歳の青春人生の波を蹴る　祥月
好きなこと言える二十歳の有権者　柳信
娘は二十歳覚悟の踏絵笑いだし　優
桃割れの二十歳の頃をなつかしみ　一栄
自動車事故二十歳の無謀記事多し　夢酔
唯の人でよかった二十振りかえる　幸太郎
ある和解だんだん遠くする二十歳　弥生
雑兵になると思わぬ二十歳　酔々
若竹の節に二十歳がつめてある　太茂津
二十歳すでに現実主義者なり　史好
妻はまだ二十歳の頃の色で着る　潮花
青竹の一節二十歳の声となる　夕花
逆光へ少年二十歳の矢を放つ　岳人
自慢する二十歳なら許せよう　酔々
岸壁の母に二十歳が生きつづけ　美幸
成人式権利ばかりを言う抱負　一二三
マスコミの取材へ二十悪びれず　幸太郎
お互に二十歳の頃は触れずおく　野生
二十歳がそこにいる風春を呼び　〆女
二十歳戦さに散った子を想う　史好
泣くも笑うもまだ裏のない二十歳　幸
小説の女に恋をする二十歳　形水
バレンタインデーあせってとります二十歳　恒明
この一歩二十歳の鐘が鳴り渡る　鎮彦
門限に遅れて帰る二十歳　鬼遊
酒、女、煙草二十歳の胸を張る　多久志
二十歳大人としてのパスポート　生々庵
髭っ面ほんまに二十歳かと聞かれ　恒明
美しき二十歳の胸の鼓動かな　寿美子
二十歳から探し三十でまだ嫁かず　静馬
子も二十歳親をクールに批判する　滋雀
世の中に恐いものない二十歳　吸江
受話器から二十歳の裸像盗みとる　天笑
二十歳希望の橋を架け給え　重人
ジーンズの二十歳ギターをかきならす　静歩
アルバイト二十歳の夢はゼニで買う　与呂志
鳩の来る窓ではたちが病んでいる　作二郎
二十歳もうなんでも知ってる喋りよう　つき子
今日の糧握ってはたちの足軽し　幸生
わが二十歳共産党にもようならず　寿美子
二十歳大人のエゴを強いられる　柳宏子
男一匹はたちという日の旅仕度　生々庵
のど仏成人式の子と歩く　水客
二十歳少しニヒルなこともいう　酔々
親の手ではたちの裾をなおされる　小松園
二十歳まだ地球儀見て飽かず　好郎
火種持つ二十静かに夢を抱く　喜風
この矛盾この不公平をいう二十歳　栞

▼おことわり—中島生々庵選「海」はスペースの都合で次号に発表。一月句会の月間賞杯は「**出漁の舳先揃えて海は凪ぎ**」草深酔升氏でした。

（編集部）

PRの欄

「川柳に笑いとユーモアをたっぷりと」
の運動展開中です。

長生きをすると言われてこわくなり　ふみよ

目をかける部下が歯痒く出遅れる　海州

内縁のままで還暦よく笑い　一灯

入選をして道楽も認められ　秀峰

（伊丹市・ゆうもあ川柳会）

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳わかやま

津田与史報

アゴ紐をゆるめ非番の顔となる　白光子
勲章が欲しくて紳士の面を買う　幸
金剛山登り続ける鬼一人　元一
小出しして続ける愛に賭けてみる　太茂津
紳士国大英国も陽がかげり　恒治
不自由な都会に増えてくる鏡　道夫
帯紐をキリリと締めて母老いず　与史
くされ縁続けていつか寄り添うて　光代
五体満足そんな自由を忘れてる　千寿子
岩壁で叫び続けた母も老い　福水
再出発堅く締めてる靴の紐　英子
紐ゆるめ我が子を射程距離に置く　和子
細々と庶民紳士の舞台うら　きみ
ネオン街夜の紳士にある打算　としよ
口あけて紳士が眠るグリーン車　牧人
紳士録金に汚れた名も並び　公子
以下次号らしいところで筆を擱く　凡九郎
寝る時は紳士はネクタイなどしない　弘生
無精髭今日は紳士もくたびれる　柳宏子
続けねば男の私の負けになる　雀踊子

京都塔の会

松川杜的報

胸のうち言えず瞳でものをいい　比呂志
こおろぎが風呂場へ暖をとりに来る　よし子
落葉篭ひきずり風の橋渡る　笛珠
待つ人もなく真白の菊活ける　明代
いたずらっぽい眼が教えてる覗き窓　蘇堂
欲しいものばかり買えないけど覗き　飛鳥
石庭を見つめて風の音を知る　和友
色瓦ここから変る街の貌　誠史
団地まだ虫が住んでる空地持ち　白溪子
打ち止めて筆は静かな無に還り　求芽
安心をしたのか虫は鳴きはじめ　潮花
みな同じ向きでうみねこ海見てる　紫香
不機嫌な蜘蛛に木の葉は無視される　水客
覗き窓さすが陶工の感どころ　杜的

いずも川柳会

板垣草丘報

メモ欄をはみ出しているカレンダー　可保留
カレンダーに出産予定日母となる　流石
日曜はぎっしりつんだカレンダー　祥月
ヘルパーにめくって貰うカレンダー　登美也
銀行が歳暮届けるほどに貯め　郁生
銀行に年末と云う警ら棒　草丘
銀行へ足軽い人重い人　巡歩
銀行も借りねばただの預け先　春梢
ともかくも暦に頼っている家風　華村
ボーナスに銀行員ももみ手する　軒太楼
銀行の金庫は景気読んでいる　正朗
銀行の隣りに住んで火の車　虎秋
支店長までが愛想の退職金　代仕男
銀行が貸せる自慢を聞かす酒　芳子
銀行で痛い文句を聞いて借り　緑之助
銀行マンですと仲人誇張する　独仙
道路奉仕女ばかりではかどらず　多賀子
奉仕した後で一ぱい欲しくなり　鐘堂
戦時中奉仕という名で狩り出され　夢酔
二重橋はじめて渡る奉仕団　みのる

川柳たけはら

森井菁居報

カステラがまだあったはず妻の留守　静水
札束へ女らしさがくずれそう　鬼焼
考えを変えればみんな有難い　房子
いっそピエロになったろか　文晴
はるか来て風がものいう鐘の音　不朽
腕組めばグッドアイデア出て来そう　菁居
ペンダント鏡へばっちりきまってる　愛
一日の疲れあくびにして捨てる　そのみ
愛されている自信笑顔がきれいです　千代美
秋天に映えよ神の子に召され　紫光
しあわせおむつを目立つとこへ干す　蘭幸
太陽が昇る生かされてる私　笑子
道はるか路傍の石にはげまされ　鈍舟
角がとれ過ぎて掴まえどこが無い　一路
待つ人があり潮騒にささやかれ　貞子
種を蒔く農夫絵になる秋の空　寛子
汗のシャツ洗って今日の心満つ　英詩
泣きやんだ孫が重たい背のぬくみ　かつ子
祝いごと兵士の墓標のめだつなり　政己
新婚の献立表を繰りひろげ　花炎
渺々と明日を嘆く津軽三味　のばら

川柳大阪

児島与呂志報

日照権さつきの鉢も抗議する　呑歩利
内職のミシン晩酌余分つき　敏
重文の折紙蔵から出た道具　眉水
気に入らぬ話へ窓を開けに立ち　君枝
恋をしたホステスの顔になり　九平
宝石も及ばぬ孫の片笑くぼ　天草
無形文化財偏屈のままで生き　笑風
宝石を指に女の虚栄ゆく　洛酔
夜なべするミシン励ます子の寝顔　喜酔
割勘の分も妓を口説いてる　秀峰
託児所を出てホステスの顔になり　徹舟
棚一つ勝手につれぬ文化財　道子
通夜の席金貯めてたという噂　重人
児が宝女を捨てて母で生き　漁人
再婚へミシンはお古を持っていき　武松
文化財巨匠の気魄秘めた艶　本蔭棒
文化財という白壁落書し度くなり　弘生
荒れ寺に重文があり客を寄せ　閑士
孤々の声望まぬいのちかも知れず　与呂志

南大阪川柳会

中川滋雀報

機転きく代りに秘密もらされず　一舟
機転きく方が静かに座を外し　柳宏子
受付けの機転社長を留守にする　形水
弱腰で吹いたラッパの音がない　肖二
弱腰を掘下げ自分と対峙する　凡九郎
弱腰というっかりにひっかかる　古方
石橋を叩いて弱腰渡らない　弘生
習うより慣れろと助言引っ込める　頂留子
都会に慣れ初心忘れた蟻がいる　万里
なれあいの裏は書かれてない歴史　雅風

外食に慣れてうれしい母の味　あいき
別居長過ぎて戻らぬ元のさや　文秋
別居する夫婦仮病の名をさがす　千万子
別居する荷物に涙も包み込み　好一
別居して居ます遊びにこいという　小松園
夫婦喧嘩も息抜きかも知れぬ　智子
息を抜く父は静かに墨をする　鎮彦
毎日が早出勤めに遠く住み　滋雀
野良犬にいつものとこで会う早出　柳志
社長の椅子へそろっと掛けた日の早出　蘭

菜の花句会

大路美幸報

おでん屋でサイレンの方角たしかめる　栞
山門の仁王が恐い天の邪鬼　牧人
缶詰にしたい微笑を持つ仏　酔々
安楽死法の矛盾をフト思う　雀蹄子
子に譲る社長の椅子をみがいてる　史葉
風船に乗れば地図のない旅で　弥生
仁王様叱って下さい罪一つ　美幸
邪心無く向かえば仁王の眼がすずし　幸生
缶詰を買う時おんな愛に飢え　鎮彦
親切を缶切りにして胸明ける　漫柳
任地のパパへ私の缶詰送りたい　誓二
風船の文字を子供が売り歩く　弘生
風船に顔案山子にも秋の顔　薫風
風船は好きですわたしをだまさない　岳人
風のある日の風船屋落ちつけず　小松園
風船を抱いて眠れぬ日がつづき　夕花
楽をして儲けた金に狂わされ　紀美代
楽園の水には甘い罠がある　洋子
立呑屋内緒でおでん出して呉れ　肖二

休止符がつづく定年後の楽譜　鬼遊

川柳高知

川竹松風報

台風が土地の値段を変えて去り　マコ
初孫の憎さ残して膝を逃げ　秋翠
里帰り去る日は重い荷をまとめ　勝子
末の娘も遂に膝下去ってゆき　とみ子
親友も不運二度目の妻も去り　繁男
勝手口ガス屋が来てるらしい音　海州
勝手口ノックに素顔盗まれる　暁耕
新婚のハミング軽い台所　あつ子
妻の留守悪友と飲む台所　十面子
人参の色台所派手にする　芽十
爪染めて何が出来るか台所　菊野
台所女房はここで齢をとり　松風
酔いざめの水真夜中の台所　桂緑
妻の留守出前が届く台所　紅雨

佳句地10選（前月号から）

竹中肖二選

エプロンに人の情が包まれる　小松園
米の値も知らず暮しの愚痴を云い　百酒
親切で背負う荷物は苦にならず　好一
退屈な男に蟻が見えてくる　度
真相を解くとき一人左遷され　鎮彦
煩悩はここらで捨てる一の橋　酔々
手応えがあって止めの矢を番え　弘生
一線をきびしく引いて身構える　緑之助
洞窟の神秘音ない音がする　紫香
子の名ほど迷わず孫の名を決める　薫風

人の顔みんな違ってるゆき違い　寛
ほつれ毛の白髪の目立つ秋の冷え　窓花
兄弟の仲まずくする嫁と嫁　秀子
孫という宝があって嫁姑　初美
潔白でありたしお札には弱し　たけし

川柳ささやま　河原みのる報

こぼれ話の中で拾ったアドバイス　八陣
裾模様蹴出しチラホラこぼれ梅　みのる
酌ぎこぼす女何かをいいたそう　越山
やる瀬ない不満日記にだけこぼし　近江
洗い髪櫛梳く明日は角かくし　百合子
もつれ毛のわけを知ってる今朝の櫛　素水
病みし手に櫛も重たきものと知る　喜美代
過去を消すつもりの櫛を強く入れ　れい子
髪なぜた櫛で身構え寡婦として　十意
ずっしりと手応え感ず稲穂架け　幸禧
猪が今年の秋を心配し　可住
静寂が落ち葉の私語を伝えて来　まどか
全快を落ち葉掃く手がかみしめる　初音
鐘撞けば音に合わせて散る落ち葉　珠玉
秋を着る錦北風に逆わず　千代子

川柳塔まつえ　祥月報

高台のカメラが盗む野天風呂　虎秋
高台の住居夢見て共かせぎ　みつこ
高台の人道雲に雨を乞う　敏雄
高台から見下して生活よい気分　鶴丸
一石を投じて高台は門を閉じ　孤呂二
はかどらぬペースに挑む十二月　逓児
はかどった代りに肩がこりました　晃男
嫁が来てバトンをゆずる台所　祥月

川柳しんぐう　川上大輪報

死の予告ふいに時計が憎くなる　富子
にこにこと家主値上げの予告する　十郎
天災の予告へお金の要る話　千寿子
天災のあとで予告の話聞く　弘生
予告篇ない人生に夢がある　与史
打ち水の小さな虹は母のもの　雀踊子
すぐ消える虹に哀しい夢を追う　幸
病んでいる窓にも虹は美しく　とよ子
働けど暮しの虹に遠くいる　功
くれよんがみんな出されて虹が出来　まさ子
総選挙同じムシナで決めかねる　溪水
決められた道で足踏みばかりする　大輪
決める事一つへ長いむだ話　寅蔵
欲望の終着駅のない焦り　武雄
終着駅人間挽歌繰り返し　福水
人生の終着駅でうろたえる　ふみよ
終着の駅なく人生旅路行く　祥月
終着駅知っていたように大往生　平城
一日の憂さを捨てて終着駅　としよ

川柳後楽（岡山市）　井上柳五郎報

おどおどと顔色見つつ無心云い　元一
顔色に出したら負けという示談　佐加恵
顔色が冴えてる斗志むき出して　照路
婆さんの顔色を読む嫁の知恵　昌吾
耐えぬいて愚痴を言うなと達磨像　博友
七転び八起きのだるまの目が光る　恒洋
眼を入れぬだるまフラシュにらみつけ　柳五郎
うれしい日だるまの他はみな笑い　秋月
気休めにフロントガラスへ守り札　ひろし
子の受験気休めでなり神詣り　定平
気休めの言葉涙がまた流れ　戡嘉
仲人の口気休めなことも云い　幽谷
気休めの言葉と女受け流し　久米雄
父と娘のすき間を母が目貼りする　たけ志
七人の敵へ隙なく朝を出る　胡風
隙のない男が好きで苦労する　勝
七人の敵が心の隙を突き　哲郎

どんぐり・まるべに・あすなろ合同忘年句会　谷垣史好報

愛情に甘え切らずに車椅子　立児
考えておくとは断る肚と知る　吸江
水鏡ふっと深さを考える　酔々
期待した程に廻らぬ椅子に就き　好郎
椅子転々としたが平のまま定年　瓢太
考えることは同じと父の過去　百酒
補助椅子の入るほど嬉しい会になり　小松園
干拓地仲間はずれの冬つばめ　いわを
花園は蝶の思案を聞いてやる　鎮彦
考えてつくった筈の子沢山　茂児
考える無言の母へ子の不安　恵美子
仲間割れしていさぎよき流れ星　薫風
叱られる気持を知らぬ廻り椅子　鬼遊
歯科の椅子泣き出す傍に母が立ち　星斗
たそがれの好きな女で紅を引く　つき子
拍手する仲間が二階に居てくれる　美幸
この人の椅子が云わせる言と聞く　弘生
考える人見て黙考ロダン展　史好
犬のくせに考え深い顔をして　弘好

西宮北口句会　小浜牧人報

人妻に情をかけて誤解され　千世子
コンピューターが人情をすりつぶす　喜世
インタビュー新婦は首を垂れたまま　清川
亡き娘に似てるこけしの首探がす　めぐる
ナツメロの流れに過去の傷うずく　総甫
消しゴムで消えない過去の傷を持つ　ろ山
腰弁の日銭に妻子の顔浮かぶ　笑女
鎌のような月があやしく胸を刺す　正祐
ランチジャー妻の鎖がついている　婦美子
女ふと菊の白さがねたましい　〆女
倖せを今日一っぱいに生きている　喜久甫
何気ない素振りで愛情たしかめる　紅扇
一枚のはがきに友情が溢れ　牧人
コマ廻わす渦にとけこむ政治色　泉女
十二月ロダンの首は考える　伊升
菊活けて人妻となる明日を待つ　半歩

城北川柳会　川口弘生報

憎しみをこめぬ拳が痛くない　道子
原点にかえり甘える母を持ち　ますえ
さわやかな秋の散歩は又楽し　秀村
背信の子の身を思う掌を合せ　満津子
反省して一票が重い選挙戦　一休
仁王さん無理な姿勢で立ちつづけ　弘生
息子には息子の生き方目をつむり　喜代子
反省の心を捧ぐ神の道　星斗
反省会甘いお菓子も用意させ　弘
反省の色をみせてる子が可愛い　恒治
初耳という事にして聞き上手　右近
初詣でもう欲張らぬ年となり　三十四
おけら火をぐるぐる今年に止め刺す　炉斉
初恋に明治女は手もふれず　つね
そのうちに止め刺す気のプレゼント　鬼遊

雅号ぶっちゃけ話（157）

まんりゅう

かしたに

樫谷漫柳

「雅号などおこがましいが辞書を繰り」

これは不二田一三夫師の御指導で川柳塔に入門後初めて活字になった一句ですが、これにあるように当初から雅号でスタートしました。娘の茶や書道のことから推して雅号は自ら名付けるべきではないと思っては居ましたが、知らぬ間の親の独断名（それも寿馬(としま)）というのに反抗する気もあり、せめて後半生の名前位は自分で選びかったからです。丁度本社の住所の鰻に関連していることと、もう一つ柳の下のどじょうとの両方に引っ掛けた心算です。（巷間千柳の上を行く万柳をもじった等と云われるのは誤解も甚だしい…）…と一寸釈明させて戴いておきます。

（工場経営・五十八歳）

再三の無心これきりとどめ刺し　千子
初孫が出来て姑愚痴も消え　玉子
妻よりも生き長らえて曽孫抱く　隼人

駒つなぎ川柳会　南柳報

見応えは唯溜息の呉服市　岸柳信
飲める人あっさり代理引受ける　南柳
月五万我慢するわと気軽な娘　規不風
うけ印を気軽くするな言い遺し　勝美
選挙前先生気軽にひき受ける　潔
気軽うに話かけられ借りられる　石捨
ほころびを気軽く縫ってくれる指　はやを
要領の悪さ毎日顔を出し　鎮彦
要領の裏をかかれた日の不覚　儀一
よめはんにくどくど要領さずけられ　眉水
さすが先輩要領よくさぼりはる　誓二
要領の悪い新兵腹が減り　恭太
要領よく立ち廻るから疑われ　綾女
要領のうまい社員が穴をあけ　善信
要領の良過ぎる二男にて勝てず　小路
要領の良いところまで親ゆずり　肖二
要領を心得ている部下一人　育園
女のことになると要領よく動き　小松園

三井が丘川柳会　高田博泉報

マスクする看護婦みんな美しい　古方
お祝辞へ純白映えるシャンデリヤ　三千子
俺のマスクは俺にしか造れない　亜成
路上の隅供養の花が置いてある　野生
マスクの良さますます鼻が高くなり　加代子
衿元にマスクの白が艶めいて　亜也子
教室に今日も増えてるマスクの子　江留美

転落の詩が始まる派手暮らし　よしひろ
マスクして炎に挑む溶接婦　珠笑
久しぶりマスクとマスクとのデイト　亜鈍
青空にむけたマスクにある平和　一念
デスマスク仏の顔になっている　牧人
取引きが終ってボスの派手な声　珠笑
三年目派手目に作った妻と出る　博泉
派手に出た月にきものの裾下ろす　琴音
酔顔へ恐いものない夜の路上　吟風
路上での駐車で商談実がいらず　竹夫
気品あるらんに派手さがよく似合い　〃女
赤い羽根路上に一つ踏まれてる　あいき
御堂筋路上を黄金にする銀杏　小松園
点点点テンテンテンで派手になり　三郎
八百長の派手なけんかが本気になり　隆子
箪笥あけて派手な衣類を見てる雨　世山
仲の良い夫婦喧嘩は派手にする　眉水
哀しくも冷えた路上の売春婦　三石

ハワイ川柳ウイロー社　林　蒼蛇楼報

あきらめのつかぬ手先で蚊を殺し　暁舟
諦らめて嫁ったが可愛いい孫が出来　秀山
あきらめた相手は若い好男子　小雪
こと此処に今更何を善後策　峯円
あきらめて居る故里が眼に浮かび　拝山
亡くした児あきらめかねて指を折り　草海
あきらめて帰る夜道に向い風　十吉
あきらめたあの娘が乗った玉の輿　万里歩
あきらめぬ努力甲斐あり当選し　一つ葉
ためといた手紙の煙眼にしみる　蒼蛇楼
金と地位あきらめ老の菊いじり　風影
あきらめた人にばったり曲り角　雪女
男なら諦らめなされと諭とす母　蒼生
災難とあきらめなされ明日がある　北海
十年ぶりあきらめた子が生き還り　雪女

虹川柳倶楽部（唐津市）新岡回天子報

田舎もの集め吐き出す八重洲口　五木
秋晴れや保母の視界をはみ出る児　照沖
初耳の話仲間はみんな知り　広坊
大都市へ村のみかんの初出荷　実
キャンプ村おはようお米借りに来る　岩光
冷房が気になる夏のへん頭痛　桑原
米は買い農家ブドウに精を出し　久隆
米の値を上げて良いやら悪いやら　勇
大都市の老後農村願望し　三日造
良き夫日曜大工に精を出し　畑中
秋晴れに減反された田は遊び　金志郎
蟻ばかり上げませぬとは給与だけ　勝一
長生の秘訣を米寿尋ねられ　紫浪
持ち寄りの米で賄う合宿所　虹汀
北極の珍らしい旅楽しそう　回天子

ゆうもあ川柳会　樫谷漫柳報

三百六十四日無沙汰と云う賀状　不二
男ばかり母の晴着がよく目立ち　優子
ポケットの中で定期も寝正月　みのる
衆寡敵せず混浴逃げたとは云わず　不二
白菜をザクリとまさに冬の音　みのる
孫の手が中継をするお年玉　漫柳

倉吉打吹川柳会　奥谷弘朗報

詫び入れてすまぬ事あり悔い残す　夕路
銀行も裸と知って首を振り　独歩

日本川柳協会第三回総会と川柳問題研究発表と討論会

とき　昭和52年2月12日（土曜日）
開場0時30分開会13時30分

ところ　読売新聞大阪本社大講堂（大阪市北区野崎町七七）

会順序　報告と展望　理事長　**片山　雲雀**
東京地区の報告　**藤島　茶六**

川柳問題・研究発表と討論
現代川柳の傾向について　**福永　清造**
今昔・時事川柳について　**東野　大八**
明治川柳について　**尾藤　三柳**
川柳問題討論・各地柳人　司会　**堀口　塊人**

討論会参席者—斎藤大雄（札幌）小泉紫峰（八戸）後藤閑人（仙台）佐藤正敏（東京）荻野義博（東京）黒川笠子（東京）大野風柳（新潟）石曽根民郎（松本）山田良行（金沢）愛知・三重より一名。野口北羊（岐阜）堀　豊次（京都）不二田一三夫（大阪）西尾　栞（八尾）？（神戸）大森風来子（岡山）柴田午朗（島根）永先芽十（高知）藤原葉香郎（坂出）吉岡竜城（熊本）安武九馬（福岡）越智加藍（対馬）

作句　当日の所感吟—二句　出席者に限る

選者・中島生々庵・平賀紅寿
（別句別選）

会費　千円（日川協へハガキで申込制）
申込は〒530大阪市北区宗是町大ビル六〇八・片山事務所内日本川柳協会

嫁ぎ行く娘に借金は伏せておき　勇峰
心より顔で善意と見せつける　寿雄
取り立てに借金のコツを教えられ　美知夫
待ち時間時間の来るのがもどかしい　碧穂
浪人の踊り羽衣石と萩つなぎ　伊之蔵
貰ってもあげても嬉しくする善意　律子
請け判は押さぬ家伝と言えもせず　すえの
酒に泣き煙草だけはと気をゆるし　照恵
折角の善意がかえって仇となり　千重子
おはやしを遠くに聞いて独り酌む　和栄
口実に父を危篤にして休み　たつえ
人間が図太い方で役が付き　弘朗

オーエスケー川柳会

大坂形水報

旅先のこの港にも唄がある　松尾
民宿で港の朝を聞いている　一扇
想い出の港は櫓を漕ぐ船ばかり　幸坊
神様も売る気充分どこも吉　千夢
百貨店売ってる人の顔を買い　諸岡
総選挙自民今年は何を売る　常夢
順番の間違いもなく定年期　亜也子
席順を吹っとばしてる同窓会　みどり
順番が狂って妹先に嫁き　栄
役職の順を待たずに定退し　博泉
小蟹でも自分の寝ぐら持っており　秀川
青春を蟹工船と共に生き　聖地
スカタンに振りまわしてる蟹の爪　健坊
蟹だって横に歩いてマイペース　亜成
定住地のない庖丁の腕を売る　一念
幻の港を探す放浪者　野生
絵になって女は港に立っている　有一
ふる里としてのみ残っている港　弥生
幸福の駅から順番くずれだす　形水
置き去りの犬が居づいている港　好郎
もう泣かぬ女にさせている港　入仙
洗面器の中で終った蟹の墓

川柳東大阪

竹中肖二報

真白いシャツで男の主義通す　智子
白髪に今日の日があり床柱　三十四
人生の余白楽しい色を塗る　文子
夕顔の白さへ懺悔したくなる　肖二
人情の機微をマイクが追うてゆく　誓二
投票を明日にマイクの声哀れ　儀一
マイクからもれた地声は若くない　鎮彦
タレントと共に踊っているマイク　綾女
セスナ機のマイク高価な声を撒く　弘生
喋べりたいのが一人マイクを待っている　あいき
裏金に税吏鋭い目を向ける　喜風
裏金を云わず卒業の子を祝い　雅風
裏金を女将うすうす知っている　雀踊子
巻き添えになるのがいやで避けておく　文秋
人目避けるには絵日傘派手すぎる　柳宏子
人の目を避けて悪事の芽が育ち　美子
失業の指望郷のペンをとる　度
目は冴えておいてけぼりの脳である　千代子
長生きは出来まい頭冴えている　恒明
刑事の勘冴えて悲しいときもある　美幸

▼**編集部から**—あまりスペースをとり過ぎると減行に追いこまれますので規定の行数をお守りください。

奥谷弘朗句碑建立

『北壁の男らしさを観て飽かず』

▼川柳塔社理事・奥谷弘朗氏は麻生路郎門下（不朽洞会員）時代から活躍、昭和29年2月に倉吉打吹川柳会を創立し、現在倉吉市文芸発刊運営委員として第1回から第23回発刊に至る。

建立地　鳥取県西伯郡大山町大山寺（倉吉営林署大山治山事業新敷地内）

建立時期　**昭和52年4月29日**

協賛金　一千円（句主の意志によりお一人一千円に限らせていただきます）

送金先　〒682倉吉市福庭伊藤勇峰宛（申込期日52年3月末日まで）

発起人—川柳塔社主幹・中島生々庵・同副主幹・西尾栞／倉吉市長・小谷善高／倉吉市教育長・福井寛／県会議員・河崎巌／市会議・山本寿雄／倉吉営林署長・伊藤勝雄／川柳塔社参事・河村日満／大山番傘川柳会々長・澤車楽／日本海柳壇選者・小林由多香／友人代表・河島薫／倉吉打吹川柳会・今村夕路—**実行委員**—独歩・布堂・一保・露杖・花子・千代・瑞枝・以上川柳塔同人—文郷・勇峰・瑞穂・律子・石花菜。

★

▼昨年10月で満60歳、27年間勤務の倉吉営林署を定年退職。営林署長のご配慮で退職記念に営林署の庭に、別の句碑『**大山を我が庭にして男生き**』が52年4月10日に建つことになりました。

本社二月句会

日時　二月七日（月）午後六時
会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
電話　271・3935番

柳話　若本多久志（今月の出題・香川酔々）

兼題
「逆風」　金井文秋選
「灰」　岩本雀踊子選
「祈る」　西いわを選
「雑音」　大坂形水選

席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守
会費　三百円
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

3月の兼題　「砂漠」「慣れ」　「丹念」「潜む」

3月句会は　7日（月）
4月句会は　7日（木）
5月句会は　8日（日）
6月句会は　7日（火）
7月句会は　7日（木）

お願い！

同人費や購読費は早目にご送金ください。ご連絡がないと送本を中止いたします。ご協力のほどお願い申し上げます。

川柳塔社運営部

・募　集・

四月号発表（2月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「進級」高津徹也選
「花まつり」渡辺独歩選
「宇宙」村田瓢太選

五月号発表（3月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「デモ」森井菁居選
「新茶」野村岬月選
「鵜」越智一水選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。
★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

一人の遅稿　大ぜい困る

定価　三百五十円（送料29円）
半年分　二千二百五十円（送料共）
一年分　四千二百円（送料共）
昭和五十二年一月二十五日印刷
昭和五十二年二月一日発行
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
郵便番号　542
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話大阪・二七一一三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

カッケ（脚気）／肉体疲労時のビタミンB1補給に
アリナミンA®
☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠
タケダ

・ペンペン草・

早や二月号

★早くも二月号の後記を書いている。といってもピンとこないでしょうが、12月27日に新年号（25・26日が土・日曜日のため）を送って、それから30日まで小遣い稼ぎの原稿。31日から元旦へ二月号に進む。

★しかし毎号のことながら一人だけ原稿がおくれているため組めないのがアレにもコレにもある。そこで組める分だけページをとびとびに片づけていく。こんなとき仕事がたくさんあるのに手の出せないもどかしさをお察しください。そんな場合、時間をムダにせぬため後記を先きに書いてしまう。だからボクにしてみれば、新年号を送り出して数日、もう二月号の後記である。

鞍馬先生入院

★原稿はかならず一、二か月前にくださる冨士野鞍馬先生が昨年11月5日に高輪三丁目の東京船員保険病院へ精密検査のため入院された。12月14日のおたよりには「ようやく粥食となり」とあり、ために次回作「源氏物語」は退院されるまでお預けとなった。ボクが存じあげてからも三十年近く毎号ご執筆いただいてきただけに、先生の雅号が本誌に見えないことはまことにさびしい。一日も早いご全快を祈ります。

無題

★昨年「川柳塔の歌」を公募した際、佳作の中に福岡市の花田鶴彦氏がある。この作者はプロ級である。花田氏はかつてボクが標語をガムシャラにやっていた頃をご存じで、次ぎのようなお便りをいただいた。「前略一その昔、私も東京在住時代は柳樽寺井上剣花坊師のもとで柳誌〝大正川柳〟〝川柳人〟の編集を永らくやっていましたが、歓びの半面ご労苦も多いのを蔭ながら拝察致しております」云々とあった。

★本誌の創刊当時、〝川柳人〟主幹の故高木夢二郎氏から「標語界の大御所が、〝川柳塔〟の編集担当者とは驚きました」と、激励のおたよりをいただいた。その後は逝去されるまで東京柳界のおうわさをよく知らせてくださった。

▼葉子コーナー

▼二月になりますと子供の頃、〝つらら〟で遊んだ事を思い出します。

▼軒端のつららはゴミが入っていて食べられませんが木の枝からぶら下っているつららをよく食べました。カリッカリッと歯応えがあり、ハートをキュッとしめつけるような冷たさでした。

▼男の子はそれを刀にして遊び、女の子は雪のお家の装飾にして遊んだものです。

★本誌の購読者で、大萬川柳などへ投句している〝杉本一本杉〟氏は元不朽洞会会員で、この人こそ標語界の大御所なのである。標語歴はボクより古いし、作品も堅実型である。この人が不朽洞会々員であった頃、標語人の錚々たるメンバーが10人近く不朽洞会々員だった。現在も何人か購読者として、応援してくれている。

★戦後なにかの川柳募集が九州にあって、賞金が大きかったかボクも応募した。それが特賞になり、手島吾郎氏（北九州・番傘本社同人）から「標語界の重鎮が川柳も……」と選者としておほめにあずかったことがある。

★「川雑」の本社句会が下寺町の光明寺にあったころ会場から市電下寺町停留所まで故北川春巣氏とご一緒したことがある。その時、氏は本川柳は一本に勉強されたボクなれば「標語をやめて川柳は儲かだいまかって」と云われた。

★「川柳」とつけ足されたもの川柳募集が休業して十年以上になる。今は欲しない物がないのが意欲がわかないのかも知れない。

（不二田一三夫）

夢が広がるショッピング
近鉄がお届けします

アベノ近鉄●TEL 621-1231

上本町近鉄●TEL 779-1231

奈良近鉄●TEL 33-1111
アベノ
上本町
奈良
近鉄

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十二年一月二十五日 印刷
昭和五十二年二月一日 発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻 五九七号

定価 三百五十円（送料二十九円）

姉妹品大和錦印

九櫻

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣
剣道具

早川繊維工業株式会社
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話（779）1690～2番

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚饅
焼売
焼餃子
豚まんの王様、やき豚入り
叉焼饅

大阪・なんば
蓬莱
TEL(641)0551～2
551

〈出張店〉なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストアー／なんば新川店／奈良近鉄百貨店